

# 『ミンゴ・レブルゴの詩』と 中世末期カスティーリャ王権

大 原 志 麻

## 1. はじめに

1465年に作成されたとされる『ミンゴ・レブルゴの詩』(*Las Coplas de Mingo Revulgo* 以下 *CMR* と略)は、カスティーリャ文学史において枢要を占める作品である。また、文学<sup>1</sup>、歴史学<sup>2</sup>双方の分野から研究されてきた<sup>3</sup>興味深い史料でもある。*CMR*は、16世紀において最大の人気を誇る作品の一つであり、その後続く世紀においても、有名な研究題材となり続けた。

表1 16世紀における『ミンゴ・レブルゴの歌』の刊行状況

年	場 所	補 足
1500年		(この版の情報はない)
1506年	セビーリャ	ブルゴスにて17マラベデイスの費用。
1510年	セビーリャ	ハコボ・クロンベルゲル。ルイス・ウホスの書店。
1520年	ブルゴス	アメリカ・イスパニア協会。
1520年		(この版の情報はない)
1525年	トレド	6月26日にラモン・デ・ペトラス。
1542年	メディーナ・デル・カンポ	ペドロ・デ・カストロ。書籍商人のフアン・デ・エスピノサの費用にて。
1545年	セビーリャ	フアン・デ・レオン
1551年	アントウエルベン	マルティン・ヌシオ
1553年	ブルゴス	フアン・デ・フンタ (Biblioteca Nacional蔵)

<sup>1</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV* (ed. Puéltolas, R.), Madrid, 1989. Charlotte Stern, “Mingo Revulgo” and Early Spanish Drama, *Hispanic Review* (1976), 22, pp. 311-332. Charlotte Stern, “Fray Iñigo de Mendoza and Medieval dramatic ritual”, *Hispanic Review* (1965), 3, pp. 197-245. *Las coplas de Mingo Revulgo* (ed. Brodeur, V.), Madison, 1986. 演劇性については、Kariya, H., “Las Coplas de Mingo Revulgo y su dramaticidad” 『中央大学人文研紀要』41号、137-152頁。このように多面的な研究がある。

<sup>2</sup> Mackey, A., “Ritual and propaganda in fifteen-century Castile”, *Past and present* (1985), 107, pp. 3-43. Nieto Soria, J.M., “Apología y propaganda de la realeza en los cancioneros castellanos del siglo XV. Diseño literario político”, *En la España Medieval* (1998), 11, pp. 185-223.

<sup>3</sup> *Clásicos castellanos Fernando del Pulgar II Letras-Glosa a las coplas de Mingo Revulgo* (ed. Domínguez Bordonada), Madrid, 1958, p.x.

年	場 所	補 足
1558年	アントウエルベン	フアン・デ・フンタ未亡人。サンティリャーナ侯『箴言集』とホルヘ・マンリケ『礼賛』と共に。
1563年	バリャドリッド	アドリアン・ゲマート。カトリック社会センターにて印刷。
1564年	アルカラ	フランススコ・コルメーリヤスとペドロ・ロブレス。ホルヘ・マンリケ『礼賛』と共に。
1565年	トレド	羊皮紙で、祈禱書のページが上下赤と黒二色。ブルガール注釈の版が国王諮問会議の商人により、フランシスコ・デ・グスマンによって印刷される。“私、国王諮問会議の書記であるフアン・フェルナンデス・デ・エレラは、この本とフランシスコ・デ・グスマンの申請書をその他の諮問会議の方々と目を通した。印刷のための許可には以下の通りである：前述の諸氏は彼（デ・グスマン）に印刷のための許可を与えた。そして前述のフランシスコ・デ・グスマンがこの証明書だけで何らかの処罰を受けることなく印刷できるように。なぜなら現在のこの日付、マドリッド、1565年に私の名前フアン・フェルナンデス・デ・エレラの名で証明するものだからである”。
1567年	アントウエルベン	サンティリャーナ侯イニゴ・ロペス・デ・メンドーサ『箴言集』において。
1570年	アルカラ・デ・エナーレス	アンドレス・デ・アングーロ。ホルヘ・マンリケ『詩集』において。
1580年	サラマンカ	フアン・ペリエール。
1581年	アルカラ・デ・エナーレス	ケリノ・ヘラルド。ホルヘ・マンリケ『詩集』において。
1581年	アントウエルベン	フィリポ・ヌシオ。サンティリャーナ侯イニゴ・ロペス・デ・メンドーサ『箴言集』において。(Biblioteca Nacional蔵)
1582年	メディーナ・デル・カンポ	フランシスコ・デル・カント。
1584年	ウエスカ	ホアン・ペレス・デ・バルディビエソ。ホルヘ・マンリケ『詩集』において。
1588年	アルカラ	エルナン・ラミレス。ホルヘ・マンリケ『詩集』において。
1593年	アントウエルベン	マルティン・ヌシオ。(Biblioteca Nacional蔵)
1594年	アントウエルベン	マルティン・ヌシオ。サンティリャーナ侯イニゴ・ロペス・デ・メンドーサ『箴言集』において。
1598年	マドリッド	ルイス・サンチェス。マンリケのコプラと、プラスコ・デ・ガライ『格言集』とロドリゴ・デ・コタ『対話』と共に。

*Las Coplas de Mingo Revulgo* (ed. Viviana Brodey), Madison, 1986, *Clásicos castellanos Fernando del Pulgar II Letras-Glosa a las coplas de Mingo Revulgo* (ed. Domínguez Bordoná), Madrid, 1958, p. xiii-xiv. より作成。

1485年までに40を越える転写がされ、年代記作家プルガールが注釈した32のコプラ<sup>4</sup>が、1485年ブルゴスでファドリケ・デ・バシレアによって最初に刊行された。以降16世紀だけで26回も再版される。活版印刷が導入された時期に著されたため、それがCMRの普及と名声を高めることを大いに助けることとなった。また『ドン・キホーテ』第二部<sup>5</sup>やフアン・デル・エンシーナ（1469-1529年）

<sup>4</sup> Pulgar, F., *Glosa a las coplas de Mingo Revulgo*, Madrid, 1958.

<sup>5</sup> Cervantes Saavedra, M., *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha* (ed. Rodríguez Martín, F.), Madrid, 1964, V, pp.20-22.

の『ミンゴとヒルとパスクアラの牧歌』*Egloga de Mingo, Gil y Pascuala* (1492年)<sup>6</sup>におけるパロディーや模倣<sup>7</sup>されていることから、その人気と文壇への影響の大きさが窺われる。

コプラ<sup>8</sup>の形式は、35コプラ、9詩句、それぞれに8音節4行詩と8音節の5行詩で構成され、oとnの語尾同音になっている。中世文学共通のテーマであるアリストテレスの四つの枢要善を軸としたsayagués<sup>9</sup>による田園詩であるというこれまでの伝統を踏まえつつも、黄金世紀初期のファン・デル・エンシーナの演劇と同じビジャンシーコを用いている。またウェルギリウスの『牧歌<sup>10</sup>』のような対話形式の牧歌という点からルネサンスの直接的影響がみられる<sup>11</sup>。このように二人の羊飼いの対話による中世的牧歌の伝統や犬、狼、羊、うさぎ、ロバ、ライオンなどの動物の用いられ方、また作品自体にルネサンス演劇が反映されている点から、文学史において注目されてきた。

また、CMRには文学的だけでなく留まらない多様な側面がある。カスティーリヤ中世史においては、歴史の声を代弁しているとされており、その歴史的史料としての重要性が高く評価されている。その理由は、アレゴリーを用いて牧歌のベールの下に政治風刺を隠している点にある。道徳的観点から全てを批判するアナテマであるこの詩の内容は、エンリケ4世(1454-1474年)の政治史と一致している。エンリケ4世期は、人文主義者として名高い先王ファン2世の治世から一転して、スペイン史上稀にみる騒然とした時代に突入し、それが王の威信の失墜と文学の発展にとって全く不利な状況を生んだとされている。そんな中、*La Panadera*<sup>12</sup>を皮切りとした風刺文学のみがわずかに活路を見出したと文学史的にはネガティブに評価されている時期である。次のカトリック両王期には、人文主義と大衆文学が盛んになることから、この前後二つの時代と比較

<sup>6</sup> Regueiro, J.M., *Espacios dramáticos en el teatro español medieval, renacentista y barroco (Teatro del Siglo de Oro)*, Reichenberger, 1996. *Clásicos castellanos, op.cit.*, p. xi.

<sup>7</sup> “Coplas del Provincial”, *Poesía crítica y satírica del siglo XV* (ed. Puéltolas, R.), Madrid, 1989及び1490年以前に作成されたFernando de Herrera, “Coplas de Pedro de Vera, de Xerez al rei Católico” (Kossoff, A.D., “Herrera, editor de un poema”, *Homenaje a Rodríguez Moñino*, Madrid, 1966, pp. 238-90. は、CMRの模倣である。

<sup>8</sup> Coplaは、4つの短い韻文を並べており、ロマンセと似ている。

<sup>9</sup> Brodey, V., *op.cit.*, p.17. コプラが作成される100年前からある羊飼いの言葉。10世紀には使われていた言葉で、当時まだ羊飼いによって使われていたとされるレオン地方の方言。

<sup>10</sup> ウェルギリウス(小川正広訳)『牧歌／農耕詩』京都大学学術出版会、2004年。

<sup>11</sup> Brodey, V., *op.cit.*, p.13.

<sup>12</sup> “Coplas de la Panadera”, *Poesía crítica y satírica del siglo XV* (ed. Rodríguez puéltolas, J.) Madrid, 1989, pp. 131-148. 1445年のオルメドの戦いにおける貴族の小心を嘲笑した風刺詩。

して、エンリケ4世期は、文学的な停滞期であると結論付けられている。

エンリケ4世期において、このように牧歌の風刺詩が力を持った理由には、文学史上の流れだけではなく、社会的背景もある。

表2 ファン2世期・エンリケ4世期の宮廷儀礼の比較

ファン2世	(一四〇六～五四)	<p>トレドにおけるファン2世の即位、フェルナンド王子がカスティーリヤの旗を持ってトレドで新しい王を知らしめる、エンリケ3世の葬列、セゴビア大聖堂におけるカタリーナ・デ・ランカスターとフェルナンド王子がエンリケ3世によって指名された摂政であることの宣誓、トレドにおけるエンリケ3世の葬列、バジャドリッドのサン・パブロ教会におけるアルカンタラ騎士団長就任式、典礼儀礼セビーリヤ大聖堂におけるフェルナンド王子のフェルナンド3世の剣の授与式、フェルナンドのアンテケラ攻略祝賀儀礼、セビーリヤでのアンテケラでの勝利後の祝賀儀礼、マドリッドのアルカサルにおけるファン2世成人の承認儀礼、コルテスにおけるファン2世の宣誓、アビラでのマリア・デ・アラゴンとの婚礼、ファン2世によるコンセホ・レアルの開会式、バジャドリッドにおける、ファン2世によるアルバロ・デ・ルナのカスティーリヤ元帥任命の祝賀祭、ブルゴスへのファン2世の入市式、カタリーナ王女のマドリガルにおける葬列、ブルゴスにおけるカタリーナ王女の葬列、王太子エンリケの誕生と洗礼のバリアドリッドにおける祝賀、バジャドリッドにおけるエンリケの王位継承者の宣誓、シガレスにおけるファン2世参加の馬上槍試合、バリアドリッドにおけるレオノール王女のポルトガルとの婚礼の祝賀儀礼、パレンシア大聖堂における大貴族によるファン2世への臣従儀礼、サンティアゴ騎士団長職別奪儀礼、トレドにおけるファン2世グラナダ出兵の荘厳な儀礼、グラナダ戦争開始のためのファン2世出席のコルドバ大聖堂での荘厳なミサ、グラナダ国境でのファン2世勝利後の典礼による儀礼、コルドバにおけるファン2世のグラナダ沃野勝利祝賀儀礼、トレド大聖堂におけるファン2世の戦勝への荘厳なミサ、サモラにおけるガリシアの都市代表と騎士たちによるエンリケ王太子の王位継承者としての宣誓、アルカンタラ騎士団長のファン2世に対する忠誠宣誓、シウダー・ロドリゴ大聖堂におけるファン2世の前でのアルカンタラ騎士団長の叙任式、シウダー・ロドリゴ大聖堂におけるアルバロ・デ・ルナの称揚の説教、アイジョンにおけるファン2世のためのアルバロ・デ・ルナ主催の騎士の祝祭、マドリッドの王城の前における馬上槍試合、バジャドリッドにおける馬上槍試合、ファン2世がグアダルーペ修道院到着の際の典礼儀礼、ソリアにおける王とその妹が王妃マリア・デ・アラゴンとの会見の儀礼、アルカラ・デ・エナーレス、マドリッドにおけるサンティアゴの日の騎士の祭り、トレドにおける聖母被昇天の日の騎士の祭り、王太子エンリケとブランカ・デ・ナバーラの婚約の祝賀、バジャドリッドにおけるサンタ・マリア・ラ・マジョール教会における新婚の王太子夫妻参列の荘厳なミサ、サンタ・クララ・デ・トルデシージャスにおける、大貴族の臣従の誓い、ブルゴス大聖堂における政治説教</p>
エンリケ4世	(一四五四～七四)	<p>バジャドリッドにおけるエンリケ4世の即位宣誓、バジャドリッドにおけるファン2世の葬列、クエジャルのコルテスにおける開会の演説、十字軍開始の演説、ムルシア都市代表によるエンリケ4世即位に際しての臣従宣誓、アルバ伯、トレビーニョ伯への恩赦の演説、王の恩赦に対する貴族と聖職者による畏敬の儀礼、フアナ・デ・ポルトガルのカスティーリヤ到着の祝賀儀礼、コルドバ大聖堂でのフアナの歓迎儀礼、メンドーサ家の忠誠の宣誓、ミゲル・ルーカス・デ・イランソの王による騎士叙任式、王によるマドリッドの大聖堂におけるルーカス・デ・イランソのカスティーリヤ元帥叙任儀礼、王のレオンへの入市式、ムルシアにおける十字軍勸説の説教儀礼、マドリッドにおけるフアナ王女の誕生祝賀と洗礼、マドリッドにおけるフアナ王女の王位継承者の宣誓、アビラにおけるエンリケ4世の廃位劇、シマンカスにおける王への反乱を戒める儀礼、セゴビアへの入市式、アビラのセント・セブルクロ教会旗の祝別と行列、トレドにおける王の復位の演説、トロス・デ・ギサンドにおけるイサベルの王位継承者の承認・宣誓、バジャドリッドにおけるフェルナンドとイサベルの婚礼、セビーリヤの入市式、ハエンへの入市式、セゴビア大聖堂におけるフアナの王位継承者としての宣誓、マドリッドとセゴビアにおける王の葬列</p>

*Cronica del halconero de Juan II* (ed. Carriazo, J.M), Universidad de Sevilla, 2006.  
*Palencia, Crónica de Enrique IV*, Madrid, 1973 - 5. *Crónica anónima de Enrique IV de Castilla*, 1454 - 1474 (ed. Sánchez-Parra, M.P.), tomo II, Madrid, 1991. Valera, D. de., *Memorial de diversas hazanas* (ed. Carriazo, J.), Madrid, 1941より作成。

フアン2世期の宮廷儀礼と比べて、エンリケ4世期には、宮廷儀礼が激減している。またフアン2世期には馬上槍試合、臣従儀礼、戦勝祝賀儀礼といった宮廷儀礼がよくみられるのに対してエンリケ4世期にはそれらが姿を消し、政治演説の多さが顕著となる。同王の年代記にも表れているように、クリスマスや年始の儀礼にすら貴族が宮廷に集まらなくなり、それぞれの領地に留まることが多かった。そのような貴族の所領への愛着は、牧歌的なものの重要性が上がった原因として考えられる。

また、エンリケ4世期の10年にわたる内戦において、王も貴族も疲弊しており、また先王フアン2世期の貴族の肅正から、明確な敗者が出て処分を受けるのを避けるため、武力ではなく「見えない戦争」によって内戦が争われた。王国は非常にプロパガンディスティックな空間となっており、都市では政治的批判のシャリヴァリや貴族による演説や廢位劇が行われ、政治風刺詩が受容されやすい状態にあった<sup>13</sup>。

このような社会的背景から、田園風刺詩は、エンリケ4世の時代に最盛期を迎えることとなる。父の死を悼むホルヘ・マンリケ<sup>14</sup>の抒情詩以外は、ほとんど個人的な攻撃あるいは政治的な批判を内容としたものに限られてしまうこととなる。その傾向は貴族同士の闘争が熾烈をきわめ、王の権威が完全に失墜してしまったことから容易に想像できると文学史上評価されている<sup>15</sup>。王の威信の失墜は、文学とカスティーリャ政治史におけるエンリケ4世の評価と一致するところである。それを受けてCMRは、エンリケ4世の治世と素行を中傷した作品であるとされているが、この作品の内容及び政治史はそのように単純なものではない。

CMR研究には、これまで文学・歴史それぞれの領域で個別に分けて研究されてきたことからの、解決できていない点が多々ある。ここでは、CMRを邦語訳し、分析していく中で、CMRの特定されていない作者の問題を明らかにする。

<sup>13</sup> 大原志麻「エンリケ4世の王位継承戦争におけるプロパガンダ（1457-74年）」『スペイン史研究』16号、23-36頁、2002年。

<sup>14</sup> Manrique, J., *Poesía* (ed. Morras, M.), Madrid, 2003.

<sup>15</sup> ホセ・ガルシア・ロペス（東谷頼人、有本紀明共訳）『スペイン文学史』白水社、1976年、50-58頁。Reseña de Valderrama Andrade, C., “*El Cancionero de Gallardo* (Azáceta, J.M), Madrid, 1962”, pp. 169-179, p. 171.

またそれを探る手掛かりとなる *CMR* に表れる王権論について、歴史的背景との連関を踏まえつつ、学際的な視座から、これまでの諸説の再考を行う。翻訳の底本としては、ドミンゲス・バルドナ編の *Glosa a las Coplas de Mingo Revulgo* (1958)<sup>16</sup> に、プルガールが古典からの引用や言及による注釈をしているものを適宜引用した。また、ロドリゲス・プエルトラス編<sup>17</sup> を参照した。

## 1. *CMR* の作者

*CMR* の梗概は以下のようになっている。気難しい薄汚れた羊飼いミンゴ・レブルゴと預言者羊飼いヒル・アリバトの対話で構成されている。ミンゴとヒルというのはカスティーリャ民衆のポピュラーな名前である。レブルゴは *vulgo* からきており民衆の立場を代弁している。アリバトはラテン語の *arrior* (予知する) と *vaticinor* (予言する) からきている。舞台は荒涼としたメセタで、レブルゴは羊飼いの状態について羊飼いのおかれている状況と問題 (王国の惨憺たる状況と諸問題) について不平をいう。羊飼い頭のカンダウロ<sup>18</sup> (エンリケ 4 世) が怠け者で、不能で、ホモセクシュアルであると批判し、彼が家畜に被害を与える狼たち (大貴族) を罰することなく、損害を与えることを許容し、最も本質的な責務からさえも逃れようとする、という羊飼いの生活における不満の列挙から成る。それに対して預言者が批判をする対話形式の牧歌である。

このように *CMR* はカスティーリャ王エンリケ 4 世 (1454–1474 年) の悪政をアレゴリーにより批判した内容となっている。このように王国のヒエラルキーの頂点に立つ王を批判していることから、匿名性が守られており、作成から 5 世紀を経た今日まで作者が確定されていない。これまでのところ作者の候補として挙がっているのは以下の六名である。

一人目はファン・デ・メナ<sup>19</sup> である。彼はエンリケ 4 世の治世 2 年目の 1456 年に亡くなっているが、エンリケ 4 世治世最初の 10 年は、反エンリケ・プロパガ

<sup>16</sup> *Clásicos castellanos Fernando del Pulgar II Letras-Glosa a las coplas de Mingo Revulgo* (ed. Domínguez Bordoná), Madrid, 1958.

<sup>17</sup> “Coplas de Mingo Revulgo”, *Poesía crítica y satírica del siglo XV* (ed. Puéltolas, R.), Madrid, 1989, pp. 221-232.

<sup>18</sup> 粗暴さと悪徳で有名で、美しい女性や寵臣と持った関係から最後のリディア王ヘラクレドから来ている。

<sup>19</sup> *Clásicos castellanos Fernando del Pulgar II Letras-Glosa a las coplas de Mingo Revulgo*, op. cit., p. xii.

ンダがほとんど存在していない。また、*CMR*の中にあるCoplá I<sup>o</sup>の1465年6月1日のアビラでのエンリケ4世廢位劇<sup>21</sup>についての言及が不可能となる。この重要な事件の前に亡くなっていることから、ファン・デ・メナが作者である可能性はない。

二人目のロドリゴ・コタ<sup>22</sup>(1498年没)は詩作の経験がないことからプロディーが作者の可能性を否定している。

三人目は *CMR* に注釈をつけた年代記作家エルナンド・デル・プルガール(1463-1493年?)である。しかし彼は32コプラの注釈しかしておらず、コプラが35あることを知らないことから作者ではない。また四人目の候補である年代記作家アルフォンソ・デ・パレンシア(1423-1492年)とも共通していることだが、*CMR*と両年代記作家のイデオロギーは異なる。文学研究からでは *CMR* の内容が、エンリケ4世への中傷と批判であるとして一括りにされているが、政治史において同王への中傷の中身は一様ではなく、後述のように複数の方向性がある。ヒル・アリバトは王の規範すなわち王権を問題視しておらず、彼にとってその羊飼いか親方たる王による枠組みは絶対である。批判を民衆の口に乗せることで批判の責任逃れをしようとしているが、王国の状況を改善することに議論

<sup>20</sup> Vno le quiebra el cayado/一人が厚かましく羊飼いか頭の杖を奪い/otro le toma el çurronもう一人が皮かばんを取り/otro le quita el çamarron/別の一人が重たい羊皮のジャケットを奪う。杖は王笏、王国、領地を表す。皮靴は土地収入、宝物、正義。ジャケットは、王の表象であるマントと財産を表している。

<sup>21</sup> Shima Ohara, “Reflexiones sobre la difusión de la formación política en el ámbito urbano durante el reinado de Enrique IV”, *Historia Instituciones documentos*, 32, pp. 247-261, pp. 261-263. 12世紀から即興寸劇(farsa)は、世俗的性格を持つようになり、騎士としての義務を果たさないものから位階を剥奪するための儀礼となった。エンリケ4世の廢位劇に先立つ例として、ファン2世がアラゴン王子エンリケからサンティアゴ騎士団長位を剥奪するために用いている。このように儀礼は、単なる偶発的かつ文化的なものではなく、制度的実効力があつた。アビラの廢位劇については、Valera, D. de., *Memorial de diversas hazañas* (ed. Carriazo, J.), Madrid, 1941, p. 99. Palencia, *Crónica de Enrique IV, Madrid*, 1973-5, p. 168. *Crónica anónima de Enrique IV de Castilla*, 1454-1474 (ed. Sánchez-Parra, M.P.), tomo II, Madrid, 1991, pp. 161-163. 1465年のアビラの廢位劇では、エンリケ4世が王の規範を果たしていないという大義名分の下、貴族が、エンリケ4世の廢位、異母弟「アルフォンソ12世」の即位劇を催した。アビラの城壁の外に多くの人に見えるように舞台が設置され、エンリケ4世の人形が置かれる。まず「王の權威にふさわしく」ないと、王冠を取り去り、続いてピリエーナ侯が「正義の管理を失ったため」王笏を手から取り去り、その後ブラセンシア伯が王剣を「王国の守り手ではないので」と言いながら取り去り、ペナビエンテ伯とパレデス伯がその他の王の装飾を取り去った。最後にディエゴ・ロペス・デ・ストウニガが「名誉を失うに値する」といいながら王座から人形を突き落とした事件である。

<sup>22</sup> *Clásicos castellanos Fernando del Pulgar II Letras-Glosa a las coplas de Mingo Revulgo*, op. cit., p. xii.

が集中しており、反乱に関しては中立的に反応している。また批判は王権に対してではなく、第一に狼である貴族に向けられている。

エンリケ 4 世の王位継承戦争において、貴族は三派に分かれていた。一つはトレド大司教のグループで、王の実権を全て奪い取り、完全な貴族政治ともいうべきものを目指すグループである。第二はビリェーナ侯ファン・パチェコのグループで新貴族の党派である<sup>23</sup>。王権を制限して恩寵を引き出そうとする点ではトレド大司教と共通するが、王権が過度の弱体化するとこれを擁護する動きにも出た。第一と第二のグループは個人としての王を私物化するという、貴族の伝統的姿勢を踏襲する点で共通している。プルガールとパレンシアは第一のグループと立場を同じくしており、王であるエンリケ 4 世を徹底的に個人攻撃し、敵対しているため、政治風刺するにしても、*CMR* とは異なった立場にある。

五人目はフランシスコ会士イニゴ・ロペス・デ・メンドーサ (1425-1507年) である。第三のグループであるメンドーサ家という旧貴族の家系の傍系を父に、コンベルソの一族サンタ・マリア家を母としてブルゴスに生まれている。ファン 2 世の大宮宰であったファン・ウルタード・デ・メンドーサ、ユダヤ教のラビにしてブルゴス司教であったパブロ・デ・カルタヘナが共に曾祖父で、彼自身のちにイサベル女王の懺悔僧となった。このようにイニゴ・ロペス・デ・メンドーサは、教権・文化・政治的な情報に通じる立場にあり、王国政治に精通していた。このことから作者の、宮廷に近いところにいる貴族出身の聖職者であるという条件に合致する。ロドリゲス・プエルトラスは、イニゴ・ロペス・デ・メンドーサの *Vita Christi*<sup>24</sup> が反エンリケ 4 世的であり、牧歌的風刺を行い、四つの枢要善を用い、言語的類似性、文体の連続性から、Fray Mingo と後に呼ばれる *CMR* の作者である聖職者はイニゴ・ロペス・デ・メンドーサに間違いないとしている<sup>25</sup>。アンガス・マッケイも *Vita Christi* が王権論のヴィジョンを展開し、*CMR* と論が一致しているためイニゴ・ロペス・デ・メンドーサが作者であるとしている<sup>26</sup>。これらに反してプロディーは、羊飼いの説論と方言が *Vita Christi* と異なるとし、イニゴ・ロペス・デ・メンドーサが作者である可能性は

<sup>23</sup> Shima Ohara, "La propaganda en la guerra sucesoria de Enrique IV (1457-1474)", *Edad Media*, pp. 117-133, pp. 122-123.

<sup>24</sup> Fray Iñigo de Mendoza y sus "Coplas de vita Christi" (ed. Rodríguez Puértolas, J.), Madrid, 1968.

<sup>25</sup> Rodríguez Puértolas, J., "Sobre el autor de las Coplas de Mingo Revulgo", *El II Congreso Internacional de Hispanistas*, 1965, pp.513-516.

<sup>26</sup> Mackey, op.cit., p.31.

ないとしている<sup>27</sup>。

中世史研究からすると、*CMR*の作者がメンドーサ家と立場を同じくしていることは間違いない。メンドーサ家は、反エンリケ集會に参加せず、批判を加えつつも、エンリケ4世を味方し続け、「正統な王」の王権の至上性、正統性、超越的権威を一貫して主張し、王権の安定が貴族の安定であるとする姿勢をとっており、それは*CMR*のイデオロギーと一致する。*CMR*はエンリケ4世中傷プロパガンダというよりも、王権庇護・貴族批判の風刺詩だからである。

*CMR*は王権が全能であるとし、王を廃位の条件とされている暴君として扱っていない。ヒル・アリバトは王に対する貴族の反抗を一切認めないとしている。まず傲慢な貴族間の党派争いが諸悪の原因であり、悪いのは王権を支配しようとする貴族である。王の無能・怠慢（恩寵政治）も悪いが、貴族こそが圧政の原因であるとしている。このように王を守る節が多々あることから、その姿勢は明白である。この時期は親族共同体というグループで政治活動を行っており、一族は一枚岩であったことから作者はメンドーサ家に近い者である。そして*CMR*はサンティリャーナ侯の義理の兄弟であるアロ伯ペドロ・フェルナンデス・デ・ベラスコに捧げられているところからも、作者はメンドーサ家と縁の深い者であるといえる。

最後の候補はフェルナン・ペレス・デ・グスマン（1370-1460年）である。プロディーは、文学的な方法論から、牧歌的作風との類似性を細かく検証し、ペレス・デ・グスマンが作者であるとしている<sup>28</sup>。ペレス・デ・グスマンはサンティリャーナ侯の叔父であり、メンドーサ家に近い人物である。しかしペレス・デ・グスマンは宮廷生活から遠い人物であり、その作品のテーマである四つの枢要善は普遍的なものである。*CMR*には確固たるイデオロギーがあり、作者は政治に精通している聖職者でなければならない。またアピラの廃位劇以前に亡くなっているので、デ・グスマンが作者である可能性はない。

イニゴ・ロペス・デ・メンドーサは、インファンタード公ディエゴ・ウルタード・デ・メンドーサが「スペイン第三の王」と称される地位まで昇ったカトリック両王期において、イサベル女王の聴罪師となっている<sup>29</sup>。異端審問所による書籍への検閲が厳しさを増す中、*CMR*が版を重ねていったのは、このような立場

<sup>27</sup> Brodey, V., op.cit., p.13.

<sup>28</sup> Brodey, V., op.cit., p. 13.

<sup>29</sup> Del Val Valdivieso, M.I., "Fernando II de Aragón, rey de Castilla", Fernando II de Aragón, el rey Católico, Institución "Fernando el Católico, 1996, pp. 29-46.

が功を奏したのではないだろうか。以上のことから、作者はイニゴ・ロペス・デ・メンドーサであるといえる。

### 3. 狼について

最後に文学の研究と歴史の *CMR* 研究における重要な誤りは、貴族＝ベルトラン・デ・ラ・クエバとしている点である<sup>30</sup>。デ・ラ・クエバは、王妃の愛人とされ、エンリケ4世の娘フアナの実際の父親と噂された人物である。このプロバガンダからフアナ王女の王位継承権が否定され、イサベル女王によるカトリック両王の即位となるのだが、公文書や廢位劇ではベルトラネーハの問題は扱われておらず、メンドーサ家はアピラの廢位劇に参加していない。またベルトラン・デ・ラ・クエバはサンティリャーナ侯の末娘メンシア・デ・メンドーサと結婚しており、メンドーサ家と強い繋がりがあがる。そのため *CMR* で批判の対象とはならない。また狼である「貴族」は「侯 *marqués*」であり「カラトラバ騎士団長」という注釈があるが、デ・ラ・クエバはアルブルケルケ「公 *duque*」であり、サンティアゴ騎士団長である。侯とカラトラバ騎士団長は、メンドーサ家のライバルであるビリェーナ侯ファン・パチェコとヒロン家のグループに属するタイトルである。また年代記の中で、エンリケ4世のホモセクシュアルの相手とされているのは、ベルトラン・デ・ラ・クエバではなく、寵臣ビリェーナ侯ファン・パチェコの方なので、この点からもデ・ラ・クエバではなく、ビリェーナ侯と条件が一致する。

*CMR* の作者をめぐる議論で、作中にデ・ラ・クエバへの言及がないことが問題視されるが、批判されている貴族が、デ・ラ・クエバではなくファン・パチェコであると理解すると、表記の問題も合わせた齟齬が解決する。

### 4. 結論

本稿では、文学的・歴史的に高い評価を受けながら、各分野で分断されて研究されてきたことによる *CMR* の抱える未解決のままの問題についてアプローチした。人文主義と黄金世紀の間に挟まれた文学的な低迷期であると、ネガティブな評価されていたエンリケ4世期だが、それに伴い権威が地に落ちた「弱い王権」だとするのは性急である。そのような解釈は中傷や批判と一纏めにしてきたことによるものである。*CMR* は単純にエンリケ4世の治世と素行を批判し

<sup>30</sup> Poesía crítica y satírica del siglo XV (ed. Puéltolas, R.), op.cit., p. 224.

たものではなく、貴族による反乱を批判し、王権の庇護の下での、混乱の政治的調整を要求した作品である。またそのような政治的イデオロギーの連関から、筆者は、貴族の親族共同体のあり方とカトリック両王期以降の動向からイニゴ・ロペス・デ・メンドーサであると特定できる。また悪しき貴族としているのは従来のデ・ラ・クエバではなく、ビリェーナ侯パチェコであると理解すると、称号や表記の不一致が解決する。

こういった批判の内容と作者の分析から、*CMR*は単なる王権への風刺詩ではないという点、また文学的にもとぼしい時期ではないということがわかる。王に対して公然と「いつでも廢位できる」ことをうそぶくのが多数派であった当時の状況を考えれば、エンリケ4世期が国王の超越的権威と王権による秩序の枠組みを固め、その枠内でイサベルを正統化し、次のカトリック両王期に引き渡した時代であった側面があったことを、*CMR*から読み取れることは注目に値する。またミンゴ・レブルゴが体現する *república* の主張により、カステイーリヤ王国の共和政の認識が広く普及されることとなったのである。

## 5. 『ミンゴ・レブルゴの詩』 *Las Coplas de Mingo Revulgo* 全訳

### Copla I<sup>31</sup>

Ah Mingo Revulgo, Migno <sup>32</sup> ,	ああ、ミンゴ・レブルゴ、ミンゴ、
Ah Mingo Revulgo, ahao	ああ、ミンゴ・レブルゴ、ああ、
¿qu' és de tu sayo de blao <sup>33</sup> ?	君の青い服は何だ？
¿no le vistas en domingo <sup>34</sup> ?	なぜ日曜日のように装わないのか？
¿Qu' és de tu jubon bermejo <sup>35</sup> ?	君の赤い服は何だ？

<sup>31</sup> このコプラでは、預言者が民衆に六つの質問をしている。一つ目はその忠誠について、二つ目は誇りについて、三つ目はなぜしかめ面をして激怒しているのか、四つ目は王国が混乱しているように見えること、その他、衰弱し、活力がないことについて問うている。

<sup>32</sup> Fernando del Pulgar, *Letras. Glosa a las Coplas de Mingo Revulgo*, Madrid, 1958, p. 151. レブルゴはラテン語の *respublica* から派生した *república* で共和政と邦訳されるが、この語は時代と空間ごとで異なる意味を持つ。ここでは言語を併記しつつ使用時に可能な限り近い意味に、適宜翻訳する。

<sup>33</sup> Pulgar, *Ibid.*, p. 151. 青は忠誠を意味する。この時代、カステイーリヤ王国は党派に分かれ分裂していた。「君が王と祖国に対して負っている忠誠はどうしたのか？なぜ王国における分裂に甘んじているのか？」。

<sup>34</sup> Pulgar, *Ibid.*, p. 152. 祝日に見せるべき喜びを示さない程の哀しみなのか？

<sup>35</sup> Pulgar, *Ibid.*, p. 152. 赤は、「どこに誇りがあるのか？」を意味し、分裂している時代に、民衆が臣従している多くの圧政者がいるということ。

por qué tras tal sobrecejo?  
Andas esta madrugada  
la cabeça desgreñada<sup>36</sup>  
¿no te llotras de buen rejo?

なぜそのようなしかめ面をしているのか?  
この夜中に出歩き、  
ぼさぼさの頭で、  
君は心浮き立たせないのか?

### Copla II

La color tienes marrida,  
el corpanzon regibado,  
andas de valle en collado  
como res que va perdida,  
y no oteas si te vas  
adelante o caratrás,  
çanqueando con los pies,  
dando trances al través  
que no sabes dó estás.<sup>37</sup>

君は哀しげな顔色をしており、  
体は曲がっている、  
鞍部の溪谷を歩く、  
彷徨する家畜のように、  
去るにも君は遠くを見ずに  
前も後を見ずに、  
ふらふらと歩きながら、  
足跡を残しながら横切って、  
自分がどこにいるのかわからない。

### Copla III

Ala, eh, Gil Arribato<sup>38</sup>,  
Sé qu' en fuerte hora allá echamos  
Quando a Candaule<sup>39</sup> cobramos

私の信仰に、ヒル・アリバト  
よくないことがあったと知っている  
カンダウロに取り立てるとき

<sup>36</sup> Pulgar, Ibid, p. 152. 分裂期にあって、王国の頭(王)は、尊重されておらず、王冠は遊興に耽っている。

<sup>37</sup> Pulgar, Ibid, p. 153. 全ての人間はこの世において、家や修道院や都市、もしくは王国における主人に従い、生きるためのなんらかの秩序を持たなければならない。もし従属外にいるのならば、家畜と比較できるように溪谷をさ迷い、群れからはぐれ、規律も秩序もなく足を振りながら歩くこととなる。預言者エリシャはイスラエルの民を、あるものは神に奉仕し、他のものは偶像崇拜をしている分裂状態であると非難し言った「いつまでこのように二つに分かれることを選択するのだ? 奉仕するべきものに奉仕せよ」など。Pulgar, Ibid, p. 154. このコブラの作者は預言者エリシャの威を借りて、国の分裂に言及している: なぜそれに異なる意見を持ち分裂を選びとるのだ? 秩序を持たず、自らがどこにいるかもわからず、王国の多くの場所での分裂において加護を与える聖書の教えなしにはなおさらである。聖ペテロによるカトリック教会法において、それがたとえ王国の分裂を前にして浅薄で、無知であっても、王や君主に仕えることが命じられている。分裂は悪しき王のみによってもたらされるものではない。このコブラでは、民衆が薄弱で墮落しているので、王国が二つに分かれるのだとしている。

<sup>38</sup> Pulgar, Ibid, p. 156. アリ(arri)バト(bato)の名は、ariolor(予見する)とvaticinor(預言する)という二つのラテン語の動詞から構成されている。

<sup>39</sup> ギュゲスによって殺された、横暴と悪徳で知られるリディア王カンダウレスのことで、エンリケ4世を指している。

por pastor de nuestro hato:  
ándase tras los zagales  
por estos andurriales  
todo el día embebecido,  
holgazando sin sentido<sup>40</sup>,  
que no mira nuestros males.

羊飼いが家畜から  
若い羊飼いの後を歩き  
人里はなれたところを通って、  
一日中恍惚とし、  
無為にのらくら暮らし、  
我々の災厄を省みることもない。

#### Copla IV

Oja, oja los ganados  
y a la burra con los perros,  
¡cuáles andan por los cerros,  
perdidos, descarriados!<sup>41</sup>  
Por los sanctos te prometo  
que este daño baltrueto  
que nol' medre Dios las cejas,  
ha dexado las ovejas  
por folgar tras cada seto<sup>42</sup>.

家畜たちを見よ  
犬と共にいるロバを  
全てのものが険しい山道を歩み、  
道を誤り、迷子となってしまう  
聖人の名において告知する  
この無秩序で怠惰で物事を軽視する者の損害を  
神が彼に手を貸さないように  
羊たちを放置し、  
垣根ごとにそれぞれ怠けることによって

<sup>40</sup> Pulgar, Ibid, p. 157. 全ての者は経験ある年長者から助言を受けなければならず、王となればそれをもっと意識しなければならない。ソロモン王の息子ヤロブアムは、年長者からではなく、怠けながら若者の助言を取り入れ、王国の6分の5を失った。統治と怠けることが両立することはないと、王が遊興に耽ってばかりいることを非難している。王というものは等しく公平に様々な多くのことに耳を傾け、良き分別でもって精査し、許しを与え、良識をもって裁き、決定し、残酷な点なしに迅速に処罰するものなので、どうしてそんなに怠けることができるのか理解できない。第一に王は神を畏れなければならない。その他多くの条件と果たさなければならない諸事は非常に多い。しかし全ての人間が多くの美德の知識を、帝国を統べる人間ほど持っていないなければならないことはない。多くの地位を占めるものが最も悪徳や罪を抑制しなければならない。肉体的快楽行為のような習慣は、棄てるのが遅いか、決してやめることができないかだからである。王侯は、誘惑や青年期の脆さに抗うよう教育されなければならない。

<sup>41</sup> Pulgar, Ibid, p. 159. 説教師に周知されているように、ロバと犬、すなわち王国全土と教会が、王の怠慢によって道を失っている。

<sup>42</sup> Pulgar, Ibid, p. 159. 全ての墮落は羊飼いかから生じており、快楽ごとに歩み、私の諫めによって正すことをしない。人間の理は、優れており、高みにある。肉体は劣っており、低いところに入り込む。肉体的快楽の後を歩く人間に、理は高く勝利し、肉体は低く敗北するのだ。このコプラは、教会と説教師もまた秩序なしには民衆のように迷い、それは王が享楽に耽り、統治に配慮することを忘れるからである、ということの意味している。

## Copla V

¿Sabes, sabes? El modorro<sup>43</sup>  
allá donde anda a grillos<sup>44</sup>  
búrlan de él los moçalvillos  
que andan con él en el corro<sup>45</sup>:  
armanle mil guadramañas,  
unol' saca las pestañas,  
otrol' pela los cabellos;  
así se pierde tras ellos  
metido por las cabañas<sup>46</sup>.

知っているか、知っているか、夢現の者を  
あそこで、コオロギのように過ごしている  
彼を嘲笑する若者が  
彼と集団になって歩いている  
見え透いた嘘をつき、  
ある者はまつげをむしり、  
他の者は髪の毛をむしる；  
このように彼らの通った跡に失われ  
小屋に押し込められてしまう

## Copla VI

Uno le quiebra el cayado,  
otro le toma el çurrón,  
otrol' quita el çamarrón,<sup>47</sup>

ある者は彼の杖を壊し、  
ある者は皮袋を奪い、  
他の者は皮のチョッキを奪い、

<sup>43</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 162. 義務に際しての無知な人間を指す。ヘシオドスは、人間には三つの姿勢があると述べている。一つは、見本が無くとも自ら理解することにおいて敏な者である。同様のことを聖ヒエロニムスも聖書の序文において、模範なしに機知を示すものは賞賛すべきであるとしている。第二は、知ることを望み、努める者。第三は、なにも知らず知ろうともしない者である。王侯にとって大いなる罪は、生来学識がなくとも、知るべき責を負っているのに、学ばないことである。なぜなら彼らはその職分により模範となることを果たさなければならぬ大きな舞台があるからである。

<sup>44</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV*, *op. cit*, p. 223. くだらないことに時間を費やすこと。

<sup>45</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 161. 王のとりまきは、王の権威を奪うので、若者であってはならない。3,4本の毛をむしるためのずるがしこさを装い、頭の毛(王冠)を破壊する。

<sup>46</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 162. 人はその生来の傾向により人々から離れ逃げるものである。しかし、あるものは瞑想を妨げる全てのコミュニケーションから解放される目的で行う。他のものは、浮世の問題から逃げるために離れる。アリストテレスはこの二つの類型を、神々と野獣であると述べている。後者の状況はすべての人間における欠陥であり、ましてや人々を統べる全て者においてはより甚大な欠点である。これらは、この世の損害の救済手段において他の手段がないので、必然的に王の中的美徳を人々は見たいと欲する。王が王国の者たちの意見から逃げ、そして彼らから愛されなくなるとき、王国に大いなる支障が生じるのである。古代の歴史家ヨセフスによると、アッシリア王デメトリウスが、プトレマイアを失ったのは、アンティオキアの近くに建てた塔の中に若者たちとしょっちゅう引きこもり、誰からも見られず、王国の統治を軽視したからである。アッシリア王サルダナパルスやカンダウレス王など類似の記憶のように、他の多くの王たちも非道徳的な遊興に耽るため、非常に離れたところに逃げ、恐れ多くもその臣下を卑俗なものにしようとする。民衆は思い切って言明し、行動する時である。

<sup>47</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 164. 王は王の権威全てを、然るべき取り巻きを除外し、若者と青年期に戻ってしまったことによって失い、尊敬されなくなった。

y él tras ellos desbabado,  
y aun al torpe majadero  
que se preçia de çertero,  
fasta aquella zagaleja  
la de Nava Lusiteja<sup>48</sup>  
lo ha trahido al retortero.<sup>49</sup>

そして彼はそれらの者の後ろで涎を流し、  
そしてさらに愚かで間拔けに  
誇らしく愛好する、  
あの若い女性までも  
すなわちナバ・ルシテハは  
混乱をもたらしした。

## Copla VII

La soldada que le damos<sup>50</sup>  
y aun el pan de mastines<sup>51</sup>  
cómeselo con ruines  
iguay de nos que lo pagamos!,  
y nol' veo que ha medrado  
otros hatos ni jubones  
sino un cinto con tachones<sup>52</sup>

彼に与える俸給と  
さらに番犬のパンまでをも  
下劣に食べるがよい  
なんという報いだろう  
そしてそれは増長し  
他の者は羊の群れも胴着もなくて  
鋏のついたベルトしかなく

<sup>48</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 165. Lusitania, つまりポルトガル出身の女性。 *Poesia crítica*, *Ibid*, p. 224. エンリケ 4 世の二番目の王妃フアナ・デ・ポルトガル、もしくは他のポルトガル出身の女性ギヨマー・デ・カストロもしくはカタリーナ・デ・サンドバルといったエンリケ 4 世の愛人だったとされる女性たちを指す。

<sup>49</sup> *El Cancionero de Gallardo* (ed. Azáqueta, J.M.), Madrid, 1962 では以下のコブラが続く。血を好む狼はベルトラン・デ・ラ・クエバを指しているといわれている。Trae un lobo carnicero / 血を好む狼が引きよせられた / por medio de las manadas; / 羊の群れに引きつけられて; porque sigue sus pisadas; / 足跡を辿ってきた; dize a todos qu'es carnero; / 全ての者に雄羊だと言う; suéltalo de la majada / 牧舎から離してしまえ / desque da una ondeada / 波が立ち / en tal hora lo compieça, / 時にはそれをめぐって争う / que si ase una cabeça / もし一頭つかまえたなら / déxala bien estrujada<sup>50</sup>. / 絞りとるがまだまだ。 *Poesia crítica*, *Ibid*, p. 224. ロドリゲス・プエルトラス編では、レデスマ伯でありアルブルケルケ公であり、エンリケ 4 世の娘フアナの父親であると噂されるベルトラン・デ・ラ・クエバのことを指している。しかし、もしこのコブラの作者がイニゴ・ロベス・デ・メンドーサならば、メンドーサ家の一員であるデ・ラ・クエバを批判することはしないはずである。コブラの流れから、デ・ラ・クエバではなく、ピジェーナ侯ファン・パチェコである可能性が高い。

<sup>50</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 166. 王の租税。ここでは共和政 (república) において、必要なものに使われるべきものが、使われるべきでないことに費やされている痛苦が示されている。

<sup>51</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 166. 教会税のこと。Los mastines は説教師や聖職者の間で、信者たちを保護し、人々を善き習慣へ説諭するために吼える犬を指す。しかし分裂している時期なので、全てが墮落してしまっている。

<sup>52</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 166. 全ての者が鋏をし続けているなら、鋏はそれを支え、全部を取り巻くだろう。後に困難があるとそれを外してしまう。セネカは『悲劇』第三において、なんらかの悪徳にひきつけられている全ての者は、当初、自分がそれに打ち勝つことに自信があり、具体的にないもしない。しかし誘惑に苦しみ、犯しがちな罪の甘い毒を熟成させると、拘束していたものの下

de que anda rodeado.

まきついている。

### Copla VIII<sup>53</sup>

¡O, mate mala ponzoña!  
a pastor de tal manera,  
que tiene cuerno con miera<sup>54</sup>  
y no les unta la roña!  
Vee los lobos<sup>55</sup> entrar  
y los ganados balar<sup>56</sup>;  
él risadas en oyllo,  
ni por esto el caramillo  
nunca dexa de tocar.

おお、消してしまえ、悪しき毒を！  
そのような態度の羊飼いを、  
松脂のついた角を持ち  
垢がつかないように  
狼たちが入ってくるのを見よ  
そして羊たちのうめき声を；  
笑い声が聞こえる、  
この陰謀によって  
入り込むことを決してやめはしない。

### Copla IX

Apaçienta el holgazán<sup>57</sup>  
las ovejas por do quieren,

間抜けな者よ、牧草を食べさせなさい  
羊たちの好きな場所の、

---

から出てきてしまうのだ。だから悪徳に対して、全ての部分に鋏をしておかなければならない。ここでは、飾り鋏のついた留め鋏で留められていた民衆からの租税を、王が使ってはならないことに費やしていることを述べている。

<sup>53</sup> このコプラはロドリゲス・プエルトラス編には収められていない。

<sup>54</sup> Pulgar, Ibid, p. 168. ラテン語で王冠を指す。mieraはネズミサシの脂で、垢がつかないように、家畜に塗られた。ここでは、王は戴冠し、角（＝王冠）を持っており、聖書によると王は、別の時代では聖油により塗油されていた。つまり正統な塗油された王は、垢をとり、知ることに適し、民衆の悪徳と罪を罰しなければならぬ。アリストテレスの『政治学』第三巻には、三つの統治のやり方が述べられている。一つは貴族政治で、より良い少数のものが民衆を治める。もう一つは、立憲政治で、全ての民衆によって行われる政治であるがこれらの二つのケースはここでは扱わない。第三のケースは君主政治で、王と呼ばれる一人が、国 (bien común) を迅速さで持って治めることをいう。もし共和政 (república) の公共の利益を後回しにするならばそれは暴君と呼ばれる。これまでのコプラにおける共和政 (república) の不満は、民衆 (pueblo) の統治への怠惰と正義の実行における無知を非難している。王国の統治を担う王侯がすこしでも注意を怠ると、圧制、正義への怠慢が生じる。しかし、王の身体が暴君であり残忍であるとの非難は見られない。このコプラでは、正統に塗油を受けた王が統治者であるが、王の規範に即した、民衆 (pueblo) の要求する統治をしておらず、罪を犯した人間が人々に強制するのをみても、民衆の呻き声を聞いても、用心してその職分を遂行することなく、快楽を貪ることをやめないと述べている。

<sup>55</sup> 圧制者たち。

<sup>56</sup> 被害者の哀訴。

<sup>57</sup> Pulgar, Ibid, p. 170. 王は、罰したり制限したりすることなく、良いものからであろうと、悪しきものからであろうと臣下が好きなように利益を得ることを許さなければならぬ。

comen yerbas con que mueren,<sup>58</sup> 死をもたらず草を食むが、  
mas cuidado no le dan; もっと注意してやれば与えてしまうことはない；  
non vi tal desque hombre só, そのような人間をこれまで見たことがない、  
y aún más te digo yo: そして私が君に告げる以上だ：  
aunque eres envisado, 例え君に告げられたとしても、  
que no atines del ganado<sup>59</sup> うまく羊の群れを探しあててすることはできない  
cuyo es o cuyo no. どれが君ので、どれがそうでないのか。

### Copla X

Modorrado con el sueño 眠気により夢現で  
no lo cura de almagrar, 傷も癒えない  
porque non entiende de dar 与えるべきものを理解していないので  
cuenta dello a ningún dueño, どんな飼い主もあてにならない、  
cuanto yo no amoldaría 私は見分けることができない  
lo de Cristóbal Mexía, 救世主キリストからか、  
ni del otro tartamudo, ユダヤ人からか、  
ni del Meco, moro agudo;<sup>60</sup>メッカの急進的なイスラム教徒からのものなのか；  
todo va por una vía.<sup>61</sup> 全てが一つの道を行く。

<sup>58</sup> Pulgar, Ibid, p. 170. 不公平な利益の取得では、魂が死んでしまう。これは怠慢から生じることである。

<sup>59</sup> Pulgar, Ibid, p. 170. 分裂期においては、人々が気ままなことをするのをやめないで、如何なる王国や地域においても腐敗が全てにおよぶ。シスマの時代には、人々が宗教的なのか、反宗教的なのか区別がつかなかった。このコブラでは統治者は人々が悪しきところから財を得ると、魂を失ってしまうとし、このような王国の無秩序は神聖なる者と人間が入り乱れるとしている。

<sup>60</sup> 異教徒に好意的で宗教的にどっちつかずとされていたエンリケ4世を指す。

<sup>61</sup> Pulgar, Ibid, p. 173. 王国の法では、ユダヤ人とイスラム教徒は、キリスト教徒との差異化のために、彼らが誰であるかを知らせるために印をつけなければならない。しかし今は、全ての良き制度が病気であるため、服装や印による違いがわからなくなっている。

Está la perra Justilla<sup>63</sup>  
 que viste tan denodada<sup>64</sup>,  
 muerta, flaca, trasijada,  
 jur'a diez, que habriés manzilla<sup>65</sup>:  
 con su fuerça e coraçõn  
 cometíe al bravo leõn  
 y mataba el lobo viejo<sup>66</sup>,

これは犬のフステージャ  
 かくも決然としていたのが、  
 死んだように、痩せ細り、飢えている、  
 神に誓って、君は不名誉にも：  
 力と勇気でもって  
 勇猛なライオンのごとく立ち向かい  
 老いた狼を殺した

<sup>62</sup> Pulgar, Ibid, p. 177. このコプラでは、レブルゴが、脆弱で逃げ回り、脅えさせられ、支配されているうさぎほどに墮落していると不満を述べている。正義に関する美德の細やかさが煩わしくないことによって、物事の知識とそれらの活動が平等な人間にさせると考えられる。しかし間違っただけの行いをしないことが肝要である。正義とは脆弱であり、利のないことである。そして、実行するための果敢さを持つている心ある人間が、年長者にも年少者にも同様にいないのである。

<sup>63</sup> Pulgar, Ibid, p. 174-175. 正義のこと。このコプラでは、共和政 (república) が羊飼いの欠点を述べ続けながら、他の、四匹の犬、正義・勇氣・思慮・節制に守られた四つの枢要徳への害について語る。正義は他の美德と連関する。戦場で、神を棄てずに、正当なことを行えば勇氣は正義となる。また色欲を制御することは節制であり、また怒りにまかせて失敗を犯すことを抑えることは忍耐の美德であり、ここでも正義を用いる。人が自分のことであれ、そうでないことであれ、契約したり用いたりする全てのことは、欠陥があったり過度であったりし、しだいに不平等となっていく、必然的に不正行為となる。そして平等かつよき割り当てによるものは公正であるといえる。このように全ての言及したことは正義の美德であり、公正で正直なものはこれに慣れていると、他のすべての美德も享受することができる。逆にこれを欠いているすべてのことが不公平な寵愛である。『倫理』の第五においてアリストテレスの定義に示されているように、この美德からの行いが正義であり、我々を悦ばせる習慣もしくは美德であり、能力に従って行う良い事なのである。これは二つの部分に分けることができる。一つは理性で、法に命じられていなくても公平性を示すことである。人を殺害したり、人に強制したりしないことなどである。それらは法がそれを命じていなくても、我々には不正であり不公平である。もう一つは合法であり、法が我々に命ずることであり、我々が住む土地において摂理から命じられるものである。これらの正義の二つのあり方は、平等と合法であり、多くの物事がそれらに合致している。法が定められる前にしても、合法的な正義は、それを侵害する不平等とはいえない。さらに、道徳的と呼ばれるものはいつしかなる時にそれを侵害するものは不平等であるといわれる。このように、正義は他の二つに分かれる。役職、頭職、恩寵を与え、分配する際、正義は、なにによって、どのように、誰に、なぜ、いつするべきなのか理解されていることを知っておいた方がよい。もう一つは、可變的 (conmutar, conmutare) なもので、人々の契約において、誰もが、受け取るべき量より多かたり少なかつたりすることのないよう平等に行うことである。これと他の美德はそれ自体に正義が含まれている。なぜなら人々を支え、正義が治めるところで栄えているからである。

<sup>64</sup> Pulgar, Ibid, p. 176. 確かに、正義の僕は、獅猛なライオンのように遂行するため、大きなものにも小さなものにも勇氣と果敢さを持つ男性でなければならない。なぜならば、全てのものは平等でなければならない、個人的な多義があってはならないからである。

<sup>65</sup> Pulgar, Ibid, p. 176. ここでレブルゴが述べていることは全部、不名誉とみなされる者がこのように退廃し、損なわれていることである。

<sup>66</sup> Pulgar, Ibid, p. 176. 強欲は雌狼であるといわれ、この世で昔その習慣があった。強欲は全ての

hora un triste de un conejo  
te la mete en un rincón.<sup>67</sup>

最後には、うさぎの哀しみ  
君を隅に蹲らせる。

### Copla XII<sup>68</sup>

Azerilla<sup>69</sup>, que sufrió  
siete lobos denodados<sup>70</sup>

アセリージャは苦しめられた  
疲れ知らずの七匹の狼に

Y ninguno la mordió,

そしてそれらはどれも彼女に噛みつかなかった

Todos fueron mordiscados<sup>71</sup>:

七匹とも噛まれた

irape el diablo el saber

到底わからない

qué ella ha de defender!:

なにを彼女は守らなければならないのか

las rodillas tiene floxas<sup>72</sup>;

膝が弱く

悪の根源である。正義が強くなされる時は、恐れから、強欲な雌狼は殺されるか、少なくともこのように鎮められ、正義の監視された君主の畏れからのなんらかの抑制がない時、正義に従わない悪が生じるだろう。聖アウグストゥスの書簡において、アリストラトンという名の知識人が、アテナの元老院であるため、共和国が繁栄し、長続きするためにはなにが必要かと尋ねた：それは正義である。他には何があるのか：正義である。確かに、これまでも言ってきたように、全ての他の美德は正義に言及されることであるので、これは良きことなのである。

<sup>67</sup> Fray Inigo de Mendoza, “Coplas de Mingo Revulgo”, *Poesía crítica y satírica del siglo XV* (Rodríguez Puértolas, J.), Madrid, 1989, p.226. このコプラはブルガール編には収められていない。ロドリゲス・プエルトラス編には以下のコプラが続く。Otros buenos entremeses / そのほかの良い寸劇をfaze este rabadán: / この羊飼いの親方はした： / non queriéndole dar pan, / パンを与えたがることなしに、/ ella se come las reses, / 彼女は家畜を食べてしまう、/ tal, que ha fecho en el rebaño / 羊の群れの中でこのようなことが行われ / con su hambre mayor daño, / 空腹でもって大きな損害、/ más entrago, fuerza y robo / より多くの損害、暴力、盗難 / que no el más fambriento lobo / それは最も飢えた狼ではない / de cuantos has visto hogaño. / 現在まで見た多くの狼の中の。

<sup>68</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 181. このコプラが言いたいのは、勇気的美徳や誘惑に抵抗する強さや守るための強さなしには、弱き者に対して持てる力全てを示すことはできないことである。

<sup>69</sup> acero (鋼鉄)の勇気 (la Fortaleza)。正義の次は、ここでは硬い金属である鋼に似ていることによってAzerillaと呼ばれる勇気について述べる。そしてこの道徳的美徳は、肉欲の誘惑に苦しめられる強さと、誘惑された時に肉欲から解放されることの強さについて語られる。

<sup>70</sup> 7つの大罪を表し、勇気 (la Fortaleza) と以前対立していた。7匹の疲れ知らずの狼によってこの美德が傷つけられるというのはすなわち、7つの大罪の誘惑に苦しむことである。ここでレブルゴは、この勇気的美徳はこのような薄弱さから生じており、肉欲からであろうと肉体においてであろうと誘惑から防御できず、防御する術がないと嘆いている。肉欲からならば色欲と渴望などである。肉体においては身体の病などである。

<sup>71</sup> Pulgar, *Ibid*, p. 178. 七つの大罪の誘惑は美德を打ち負かすことはできず、逆に「七匹とも噛まれる」すなわち、大罪を振り払うことができたということである。この誘惑との戦いによって、聖パブロはローマ人たちに病気に對しても美德は完全であると述べている。

<sup>72</sup> Pulgar, *Ibid*, pp. 179-180. その美德が確かでないならば、全てが崩れる。ヨブの例に言及すると、友人たちが健康だった時には弱みにたいして努力できたのに、今となっては膝が弱る病からそられて、誘惑に苦しめられることへの術や力がないと譴責した。アリストテレスは『倫理』第三

contra las ovejas coxas  
muestra todo su poder<sup>73</sup>.

びっこを引いた羊に対して  
その持てる力全てを用いる。

### Copla XIII<sup>74</sup>

#### La otra perra ventora<sup>75</sup>

#### もう一匹の雌犬ベントーラ

において、勇気的美徳について、悪しき名声に怯える者は、善きものそして道徳的であることを怯えなければならないと述べている。なぜなら、それを畏れないのは恥知らずだからである。貧困、病、死、憎悪は人間の罪によって生じるものではないので、強き男性は善きもの、道徳的であることを畏れなければならないのである。同様に、戦場で死を恐れているが、富を果敢に分配する者、そしてまた逆に武力における危険に果敢にも身を晒す者もいる。彼らは費やす者がいない者がいようとも、自由において密接である。それらのことはトゥルス・ホスティリウス(Hostius Hostilius)が『祭式』で述べている。恐怖に打ち勝つことは渴望に打ち勝つことではなく、多くの使命に苦勞することは、小さな肉の快樂に勝つことではないことは確かである。ここで強さはいかなる方法でもやってくる誘惑に苦しむことを知っていることを指している。同様にアリストテレスは、誘惑に怯えている者は、絶望しており、強いものは肉の欲情への苦しみに備える。そして多くの場合臆病な者は、強く見せたいがために、尊大である。しかし、勝てる者たちは、それを常態として示す。強き者は、危険を前にして、静かに毅然としている。そして危険において敏速で、男性らしく、逆境にも揺るぎない。そして勇敢を五つする方法をもたらす：一つは廉恥から生じるものと言われており、トロイアの英雄ヘクトルは以下のように言った：「もし戦場を棄て去る者が眼に入ったら、私のことをなんて言うであろう」。第二は、指揮官が与える褒美のために、危険においてもしっかりとしている者たちからである。第三は、戦争で慣らした騎士であり、武装した経験の多さから強く見える者たちである。勇気の第四の仕様は、憤激から生じるものである。第五は多くの勝利をしてきたことよって、勝者になる期待を持ちつつ、危険においても強く見える樂觀的な者たちである。しかし、アリストテレスはこれらのすべての勇気のあり方は、本当の勇気でないということができるとしている。本当に強いといえる者たちは、どのような困難や重大なことが襲いかかってきたり、もしくは危険が待っていたりしても、美徳によってのみ、勇気でもって、死が待っていようとも、名誉に値せんとする者たちである。

<sup>73</sup> Pulgar, Ibid, p.181. 片足の不自由な羊を、弱く庇護のない人を侮辱し、強要することは、強さとも、ましてや勇気ということもできない。無情であり、残酷である。強さと高貴さは無論侮辱や無理強いをすることではなく、侮辱や強要を防御する者である。

<sup>74</sup> Pulgar, Ibid, p.184. このコプラでは、知慮の徳の役割は不都合や欺瞞を知ることであり、人生に起きることに対し、正確に備えることであり、それを怠ると物事への真の理解を失うほどであると述べられている。

<sup>75</sup> Ventoraは知慮を表す。Pulgar, Ibid, p. 182. ここでは四つの枢要善の一つ知慮について言及されている。犬がベントーラと呼ばれているのは、本能によって獲物を遠くからにおったり、感じたりする犬がいるように、この徳の役目は、支障を回避するために物事を感じたり知ったりし、よく、間違いなく生きるために、人生に起きる事柄や場合を予見することである。これら全ての四つの枢要善のよりよい表出のためには、道徳的徳全てを知ることである。アリストテレスによると、多くの行動によって人間に既に備わっている習性は、欲情を選択することである。理性が真実かつ正直な願望である時、思い浮かべることから人は選択をし、高潔であることが必要である。願望が傷ついた時、理性と習慣は退廃する。これは、真実を知り、正直な欲を用いることは、相互理解に関してよいことである。この知慮の徳に戻すと、アリストテレスは、理性に沿った自分のなしえる事柄の選択は思量にたけたものであり、知慮は、よく生きることへ言及された良いことにおいて、相談相手を容れることになるだろう。知慮の徳は三つの部分を持つ。第一に、過去の事柄を尊重しつつ、現在のことを整え、秩序立てることである。第二に、言葉を抑制し、謙

que de lexos barruntaba  
y por el rastro sacaba  
cualquier bestia robadora<sup>76</sup>,  
y las veredas sabía<sup>77</sup>  
a donde el lobo acudía,  
y aun las cuevas raposeras,  
está echada allí en las eras  
doliente de modorra<sup>78</sup>.

遠くから予見していた  
そしてつけた跡により  
盗人の獣がつけていった  
道を知っていた  
狼が行く場所への  
休む洞窟の場所さえも  
そこで寝そべり、  
睡魔に襲われる

#### Copla XIV

Tempera<sup>79</sup> quitapesares<sup>80</sup>  
Que corrie muy conçertado,  
reventó por los ijares<sup>81</sup>

テンペラ・キタペサーレス  
とても整然と走り、  
脇腹から打撃を与える

虚になることである。これについてソロモンは『箴言』で、知慮とは口を制することのできることだ、と述べている。第三は悪しきことから逃げ、善きことを選択することである。

<sup>76</sup> Pulgar, Ibid, p. 183. 知慮の役割とは、不適切なことを知ることで、ここでは盗人の獣と描かれている。

<sup>77</sup> Pulgar, Ibid, p. 183. 確かに知慮は、正義の道を行くために、いつでも魂を罪へと誘う狼に出くわさないために多くの道や小道を知るべきことである。

<sup>78</sup> Pulgar, Ibid, p. 183. この睡魔の苦しみは頭にあり、そこから受難への大きな混乱をもたらし、識別したり成すべき確かな判断を長い間妨げたりするほどである。これにより本文では、この徳は当時非常に苦しいもので、職務に用いなかったと述べている。

<sup>79</sup> Pulgar, Ibid, p. 185. これは節制の徳で、既に言及した他の三つの徳にも役立つ。その示すところは明白である。正義が節制されていかなければ、のちに厳正となり、そして厳格と呼ばれ、残酷さに近いものとなるだろう。貞節が節制されなければ、のちには無謀だとか気違いだと呼ばれることになる。知慮は節制なくとも問題が少ない。なぜなら節制的でない人は思量のある人ではないからである。このように、この徳は、完徳のためには、ほかのすべての徳を取り入れることが必要である。

<sup>80</sup> Pulgar, Ibid, p. 185-186. ここでもう一匹の犬を、テンペラ・<sup>キタペサーレス</sup>と呼ぶことは理由のないことではない。なぜなら全ての節制的な人間は行動において欠点を補い、人をかき乱す行き過ぎを大目にするからである。そしてこの方法において<sup>ペラーレス</sup>苦悩を取り去り、そして人が持つ喜びを引き起こすのである。アリストテレスは、節制が愛と悲しみについて公平な弁えを保っていると述べている。この徳は三つの側面を持っている。禁欲、精進、質素である。禁欲は、人が欲望を理性によって節制し、控えさせる徳なのである。

<sup>81</sup> Pulgar, Ibid, p. 186-188. この節制の徳は失われており、そして飽満しすぎるまで手当たり次第に飲んだり食べたりすることで、脇腹に打撃を与えられることは、その職務についての全ての行動において、過度であり、狐や熊の場所にも気付かないのである。アリストテレスは、不節制な者と、調子の狂ったものがあると述べている。不節制は過度を見て知っているのだが、行っていることを制止することができないほど抵抗することに脆弱なことである。狭量は、悪徳との大きな繋がりにより、有害な者への真実の理解が既に崩壊しており、そのため節制の徳は、狭量に対して、知り、抵抗するための効力はない。このように、なぜ獣とともに知らせるのかは、ここ

del comer desordenado;  
y no muerde ni escarmienta  
a la gran loba hambrienta<sup>82</sup>,  
y aun los zorros y los osos  
cerca della dan mil cosas,  
pero no porque lo sienta.

放埒に食することによって；  
そして嘯みつくことも懲りることもない  
飢えた大きな雌狼を  
狐や熊さえも  
その近くから多くの場を与え  
しかしそこに落ち着くからではない

で以下のように述べている。これら熊と狐の二種類の獣はその近くに場所を持ち、それらとともに知らせるが、感じないことを知っておくとよいだろう。そのためこのコブラで言いたいのは、節制の徳は、欲情と理性から生じるもので、それが歪められ、損なわれ、節制が欠けている人々は獣じみた行いをする。これらの四つの枢要善に触れてきたことについて、哲学者（アリストテレス（高田三郎訳）『ニコマコス倫理学』岩波文庫、1971年）や他のものが書いたものから短く引用してきたが、しかし全てを引証することはできない。全てを守り守られることは無論できないであろう。そのため、君主や都市の支配者のように、よく統治されるため、触れ役に知らしめることを命じ、全ての法規と法令が守られるよう骨を折るのである。このように神の摂理は、世界がよく統治され続けるために、全てのこれら四つの法、すなわちこれら四つの徳が知らしめられ、守られるように命じるのである。そして四つの徳を守らなければ罰せられる。それぞれの時期で経験してきたように、この人生の向こうでも四つの徳に背いたことで処罰される。なぜなら不当で脆弱ならば墮落し、そして軽率で過度ならば後に失われるからである。いかなる王や君主も、これらの四匹の犬もしくはそれを支え、守り、増やしていく柱を持たないなら、軍隊、多くの富はもちろん、城塞そして帝国を維持する土地への権利を生じさせることはできない。サルスティウスは『カティリーナ戦記』（『カティリーナの陰謀』（合阪学・鷲田睦朗訳註）大阪大学出版会、2008年）で、カトーがローマの執政官や元老院議員に行った提案を引用している：我々の先祖が武力をもってして、我々の小さな共和国を大きなものにしたと君たちは考えたくはない。なぜならそのよう我々がしていたらより美しいのは我々だからである；我々は先祖より多くの都市、武器、馬を持っているが、彼らは彼らを偉大にした他の物を持っていたからであると知っておくがよいだろう。家系において、術策；国においては術策を；外では、公平なる帝国と自由に助言する魂は、罪を犯し、悪しきことを望むことを止める。カトーが説論するこれら三つのものをよくみる者は、ローマが創造したものを通して、全ての他の四つの徳を理解する。これらの場において、カトーは、我々は共和国の乏しい金庫にも、一人一人の豊かさを持っていると述べている。我々は富を称賛し、怠惰に努め、悪しきことから善きことを起こさない。なぜなら、徳の褒美は意欲を持っているからである。公益の保全への配慮なしに、個々の財産に理解を示すと、ローマに入り込む誰もが、破壊してしまう。ここでは共和政がその理由によって全てが失われることについて、不平を述べている。

<sup>82</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 大食の罪を表す。飢えた雌狼と引き合いにしている精進は、人の能力や、要求されている技量を超えた事柄に乗り出すことを止め、節制することを知らしめることである。精進には二つの側面がある。一つは憤激しないように自制すること。もしくは憤激しても頑迷なことをいわないことである。もう一つは、生活における過度を節制することで、体を痛めつけたり、体質を不安定にしたり、死を招く病を助長するような色欲を慎むことである。次の側面は質素で、これは人間特有の徳である。

Copla XV<sup>83</sup>

Vienen los lobos hinchados <sup>84</sup>	思い上がった狼どもがやってくる
y las bocas relamiendo <sup>85</sup> ,	舌舐めずりをしながら、
los lomos traen ardiendo <sup>86</sup> ;	背を燃え立たせながら；
los ojos encarnizados <sup>87</sup> :	残酷な目
los pechos tienen sumidos <sup>88</sup> ,	埋もれた胸
los ijares regordidos <sup>89</sup>	太った脇腹
que no se pueden mover,	で動けない、
mas cuando oyen los balidos	しかし羊の声を聞くなり
ligeros saben correr <sup>90</sup> .	羊を貪り食うため素早く走ることができる。

<sup>83</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 家畜の群れに犬がいない時には、ほどなく狼たちがやってくることは確実である。これらの四つの枢要善が国を治めていない時、ほどなく暴君たちが入り込んでくる。このコブラでは、7つの大罪全てとともにやってくる王国についてこのように述べている。すべてのこれら7つの大罪は狼において統治され、一つ一つが他の罪を伴う。君主の土地において統治全般に配慮せず、享楽のみに理解を示せば、間違いなくこのような同伴者たちは統治したいところどなにをするかを、良き判断のために知っておかなければならない。このコブラでは、暴君が、民衆において悪をなせば、七つの大罪を伴った狼を飼うとしている。

<sup>84</sup> Rodríguez Puértolas, J., *Poesía...*, p. 227. 貴族と有力者を表す。Pulgar, Ibid, p. 189. 「思い上がった狼どもがやってくる」というのは傲慢の罪である。さらには、傲慢は反抗、争い、虚栄、執拗、不和、思い上がりをもたらすことを知っておくといえよう。

<sup>85</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 「舌舐めずりをしながら」は暴食である。第二の罪には暴食が提示されている。大食は、言葉の乱れ、理解の鈍さ、酩酊を伴う。

<sup>86</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 「背を燃え立たせながら」は色欲と理解されている。色欲は、理解の無分別、無節操、揺るぎやすさ、高揚、卑劣、悲嘆と痛悔が伴う。

<sup>87</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 「残酷な目」は憤怒を述べている。憤怒は争い、不品行、憤り、軽蔑、冒瀆、殺人を伴う。

<sup>88</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 「埋もれた胸」は羨望である。憎悪、悲哀、苦惱、中傷を伴う。

<sup>89</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 「太った脇腹で動けない」は、怠惰である。悪意、絶望、心の弱さ、愚鈍、恐怖をもたらす。

<sup>90</sup> Pulgar, Ibid, p. 189. 「羊の鳴き声を聞いたら余計にすばやく走りだす」は、虚偽の強欲であると理解されている。窃盗、強奪、高利、汚聖（シモニア）、虚偽、偽証、欺瞞をもたらす。狼は悪企みを働か、山羊の鳴き声を聞けばすばやく襲いかかる。しかも一匹だけではなく、三匹四匹とさらに噛みつき、全ての群れを崩壊する。このように強欲と貪欲は、ここでは狼がその役を演じているが、狼たちが遠吠えをし、分裂と不和を大地で聞けば、のちに、許すためでも育成するためでも支えるためでもなく、貪欲のままに襲いかかる目的で走り寄るのである。

Abren las bocas rabiando  
de la sangre que han bebido;  
los colmillos regañando

欲望しながら開く<sup>92</sup>；  
血を飲んだ口を  
不平をいながらそれらの牙は<sup>93</sup>

<sup>91</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 196. このコブラではこれらの暴君と全ての人間は大変強欲であり、大いなる豊かさを持つべく、満腹せず、そしてその留まることを知らない強欲は、人々に大いなる損害を引き起こす、と述べている。

<sup>92</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 193. 上述のこれらの暴君が「血を飲んだ口を欲情しながら開けている」と述べている。血は民衆の汗と労働から集める富である。

<sup>93</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 193. 「不平をいながら牙を」は上述の口と同様に理解できる。確かに強欲はこのような飽くことを知らない。どんなに豊かであっても、常に何かを蓋りに欲しがり続ける。またこの欲が膨れ上がらせるためには、人々を不意打ちし、混乱させることが必要である。強欲と全ての悪の根源がどのようなものかについては多くの記述がある。一時的な財への飽くなき強欲がもたらす損害をみると、それらは実際のところ、生活を支えるため以上のものであることはない。過剰は余剰の仕事や、そして欠乏に対する苦難をもたらす。なぜならば手に入れることの困難さから、財を享受することができないからである。聖書を読むと、神は、天の露からとったマナを、砂漠のイスラエルの民に与え、そして、そこから一日の生活に必要な分だけめいめいがとるようにとお命じになった。余計にとったもの全てが腐ったり痛んだりした。私にとって、三つのことは、我々の人生についてここで、顕著な例を示すことができる。第一に、神の摂理は全てのものに与えることに特に配慮をする。つまり天から共通の糧を与えることである。第二に、今生で生活を支えるために、しかるべく働くことを我々に説諭する。つまり、我々は起床し、マナを得るために仕事をしなす。なぜならば、誰も怠惰でいては家にそれを持ち帰ることができると考えていないからである。必要なのは起床し、糧を模索するべく、少なくとも、多くの悪の母である怠慢を避けるために働く。第三は、その日の生活に十分以上のものをとったら、腐り痛んでしまうことである。我々がする主の祈りでは、神にはその日のパン以上の、十年分ではなく、一日分の糧を賜るよう、神に祈る。なぜなら神は、我々に日々の生活の糧を与え、日々神の目に届くことを望んでいるからである。そして、我々は今日の分以上のものを望まない。なぜならば明日の生活は確かではないからである。左記のことや仕事、そして一日で生活に必要な分の一時的な財を取るものが犯す危険をよく考慮するのとして、何も活用することなく持ち続けることからの過剰をどうしてわからないのかを、そして、持ち続けるものが欠乏と持ち続けることに寄り痛ませることで、だれが余剰を持ち、そしてそれを欠乏している者に知らせることについて苦悩しないのかを知りたいがる。塩についても同様で、非常に美味しく、有用性がある塩をとることは必要であるし、味が落ちたり痛んだりするくらいなら、摂った方がよいのである。我々はこのことや、大きすぎる領地や、それぞれの条件によって、人々の間に程度や差異があるということについて否認することは考えない。なぜなら、天の国においてさえも、使徒にも位階や宮殿があるといわれているのだから、地上においては尚更である。持っている富の大部分を捨ててしまうなどとは、もっと考えないだろう。なぜなら哲学者アリストテレスは『倫理学』第一巻において、それらの差異なしには、全てのことが明らかにはならず、成すことができる美德もわからない、と述べている。しかし、目的も、その有効活用や、他のことを、いつ、どこ、どのように行うべきかを伝達しない強欲は大いに責められるべきである。なぜなら、これらの財産が腐ってしまうからである。持たないものと等しくするために持てるものを同じくしようと、必要以上に財を獲得しようと努力する者もある。これは確かに無駄な心づかいである。そして持つものが自身に苦悩し、誰もより多くのものを与えることができないのである。特に野心からとったなら、人々からの成果を持ち込み、自らの必要性以上の使用人を持つように勤める。かのギリシアの学者メネ

parece que no han comido;                   まるで何も食べなかったかのようである;  
por lo que queda en el hato,               家畜の中に残っているの  
cada hora en gran rebato               毎時間の不意打ちで  
nos pone con sus bramidos;               我々にそのうなり声とともに;  
desde que hartos, más transidos   満腹してもさらに空腹に突き動かされ  
los veo cuando no cato.               これまで何も食べたことがないかのようだ。

Copla XVII<sup>94</sup>

¿No ves, nescio<sup>95</sup>, las cabañas           愚か者よ、家畜の群れが  
y los cerros y los valles<sup>96</sup>,           険しい道や谷が、  
los collados y las calles               鞍部と道が  
arderse con las montañas?   山と共に騒然としているのが見えないのか?  
¿No ves cuán desbaratado               いかに混乱し、  
está todo lo sembrado<sup>97</sup>,               全ての種が蒔かれた畑、  
las ovejas esparcidas<sup>98</sup>,               散逸してしまった羊たち、

デムは、多くの家族に奉仕されるのをみて、自らを過剰であると非難しながら、理解する：たった一人の人間の必要を満たすために、こんなにも奉仕されなければならないのか？ 私一人のためにこんなにも出費をするのか？ 人がいうように「無分別に私は行く」。多すぎる使用人をもつことは疑いなくよいことだと考えられていない。なぜなら、必要とする世話は、この世の仕事と他のものの喪失に強欲を増長させるからである。多すぎる富による強欲の抑制のための教義については、多くのものが記している；日々我々は偉大なる説教師や扇動者、叱責する者を見るのだ。しかし、教義を示すものは教義を示されるものと同様に、多くの場合、我々はこの悪徳に、叱責するよりも陥ってしまうものだ。なぜなら強欲は、閉ざすものもなければ、底もなく、我々は、何らかの強欲に陥らずに強くある人間を僅かしか見つけることができない。しかし、強欲を抑制できるに越したことはなく、無論、よりよく生きることができる。誠実で勤勉であろうとする全ての人間は、生活に必要なもの、糧を食するために何が必要か、予想を外さず、生を支えるための糧を欠乏させないようにする。神が我を導く、いかなる物も私に欠けるものはないだろうと、ダビデが詩篇で述べている。そして神を仰ぐならば、神は我らを導くことは疑いなく、そして我々を導くのであれば、必要なものを欠くことはないだろう。

<sup>94</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 198. このコプラは、王の支配が欠如し、暴君の厚かましさと強欲により全て失われ、国王諮問会議、さらには民衆の集会も、悪の救済手段がわからないであると述べている。

<sup>95</sup> 民衆側がやってきた支配者の欠点による悪に答えたあとで、今以下のことを述べる。「愚か者よ、見えないのか？」とは「善きことが失われ、しかるべき支配が全てを燃やし消費しているのが見えないほど、君は無分別なのか？」。

<sup>96</sup> 「険しい道と谷」は、集落がなく人が住んでいないところ。

<sup>97</sup> 「種がまかれた全ての畑がどんなに混乱しているのが見えないのか？」は、人がどんなに分裂し、混乱している王国によく種をまいても、芽も出ず、実をなさない。なぜならば、時期が混乱し、正義がそれを成す場が与えられないからである。

<sup>98</sup> 「散逸してしまった羊たち」は、羊飼いたちの集会をメスタといい、助言、法規をつくり、管理に必要なものが与えられる場である。これらの牧羊組合は、国王諮問会議、集会、市会が都市の

las mestas todas perdidas  
que no saben dar recaudo?<sup>99</sup>

牧羊は全て失われ  
税を払う術もないのが見えないのか？

Copla XVIII<sup>100</sup>

Allá por esas quebradas  
verás balando corderos<sup>101</sup>,  
por acá muertos carneros,  
ovejas abarrancadas,  
los panes todos comidos<sup>102</sup>  
y los vedados pacidos<sup>103</sup>,  
y aun las huertas de la villa<sup>104</sup>:  
tal estrago en Esperilla<sup>105</sup>

あちらではそれらの峡谷あたりを  
羊たちが鳴いているのが見えるだろう  
そこら辺では死んだ雄羊、  
崖っぷちに追いやられた羊  
パンは全て食べつくされ  
そして草を食べることを禁止されたところも、  
そして村の農園までも  
エスペリージャにおけるこのような害は

代官（レヒドール）と法によって行う。ここでレブルゴが言うように、全てが失われている。

<sup>99</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 198. 「税を払う術がない」は、与える助言がないということ。確かに分裂の時期において、全ての持つべき助言は失われ、回避するものもないということであるのは、経験上わかることである。

<sup>100</sup> Pulgar, *op. cit.*, pp. 199-201. このコプラでは、レブルゴがその応答を終わらせ、そして一般的に悩まされている悪を述べている。王国の全ての身分、聖職者も世俗の者も、受けている被害に苦情を述べている。よきことを行う全ての力が失われ、そして都市と周辺領域の特権のよき慣習が破綻し倒壊している。特にこのような害がスペインにおいて生じたことは見たことがないと締めくくっている。

<sup>101</sup> Pulgar, *op. cit.*, pp. 199-200. 潔白な者、無実の者が嘆き哀しんでおり、それは王国の全ての階級全体に及ぶことである。確かに多くの場合、神はこの地上においてあまねく争いを許しておられる。また良きことにおいては悪しきことにおいてと同様に、様々な側面から、悪しきものはなぜなら悪いからであり、良きものは悪を許すので善いのである。そしてそれらを罰することができるし罰せられた者とするよう努める。無知による罪と悪を放置し、わずかな厚かましき、得ること、もしくは失わないこと、もしくは満足すること、もしくは不満でないようにすることを悪人に対して、敵意を見せず育成させる。もしくはその他の良く正直な人の尊敬によって育成することは義務である。そしてこのようことは悪事に悪しき者たちが参加者とならないのを欲するように、しかし、全体的な紛争に苦しむ中に、神が地に送った彼らと共にある参加者なのである。

<sup>102</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 200. パンと語っているのは、パンが力であると理解されおり、パンがすでに食べられたというのは、悪に抵抗するものが何もないということである。

<sup>103</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 200. 聖なるものがこのように食べつくされ、暴力を受けたということである。

<sup>104</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 200. よく手入れされた農園が豊かな実りをもたらすように、特権とよき慣習が守られた都市と周辺領域では、よき政治が栄えている。そして全てが腐敗しているので、周辺領域の農園というのは特権と人々のよき慣習でもある。

<sup>105</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 200. このくだりで、喪失の多いなり痛苦を示しながら、不満を締め括り、このような害が生じたことは見たことがないと述べている。エスペリージャはスペインのことである。ギリシア人は星のことをエスペロス (Esperos) と呼び、スペインにおいて海の道標を意

nunca vieron los nacidos.

生まれてこの方見たことがない。

〔預言者の反駁〕

Copla XIX<sup>106</sup>

Ala, eh, Revulgo hermano,  
por los tus pecados penas<sup>107</sup>;  
si no haces obras buenas<sup>108</sup>  
otro mal tienes de mano:  
mas si tu enfotado<sup>109</sup> fueses  
y ardiente tierra<sup>110</sup> pacieses

ああ、なんだ、兄弟レブルゴよ、  
君の罪により；  
もし良きことをなさぬなら  
さらにもう別の悪しきことがある：  
もし君が過信するならなおのこと  
欲望に駆られた地は

味する。民衆のこれらの不満を抱く害を知りたければ、内戦期の年代記を読めば、そこで大きく扱われている。

<sup>106</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 205. このコプラは、諸悪の責任を民衆に問い、三つの神学的徳である、信仰、希望そして愛がないならば、大きな被害を受けると述べているようである。

<sup>107</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 202. 預言者はレブルゴの不満を聞き、今度はレブルゴの原罪と罪が原因となっているものについて述べていく。24章で触れたヨブであるが、神は、民衆の罪により、偽善者に統治をさせた。王に民衆が押し付けられるのは、逆に王が民衆に押し付けられることであり、その原罪が欠陥ある支配者を招くこととなるのだと述べてつ、ヨブ記に基づき、預言者は応答している。

<sup>108</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 202-203. 民衆がよいことをしないなら、より悪しきことに見舞われるだろうとさらに述べている。ここでは二つのことを注記している。一つは、民衆に責任があるところの罪である。もう一つは、預言者から民衆への警告と説諭である。第一については、王に欠点があり無知であるのは確かである。もし王国の主要人物が王に忠実で王国の友人であるならば、忠誠によってそれらの問題を覆い隠し、賢明さでもって補うならば、王への中傷もなく、王国も困窮することはない。王に助言し、不節制を排し、王の欠陥を補うという主な仕事をすれば、彼ら自身が熟成し、恵みを与えるということが起きるといふものだ。しかし、ある者は恩寵のために諂う。他の者は、持っているものから多くのものを自分のものへと移すことを考えながら、王の欠点を流布し、その人格を醜悪なものとしながら、王国を混乱させ、王国に紛争やスキャンダルを巻き起こす。そして、これらの類似の助言者や支配者でもって不和が生じ、そこで王国における崩壊が起きるのである。逆によきキリスト教信者や忠実なる人々の多くが行わなければならない。アッシリア王ニヌスとその総督たちは、蛮族であったにせよ、王の欠陥を知っていながらその領地の誰もがそれに気づかないほどの守りを置いたのである。正しい命令と統治を行うものである彼らは、王に栄光をもたらすため、想起させ、発表し、流布した。そしてこれにより彼らの忠誠が維持されている全期間の平和が保たれたのである。第二の説諭は、考えを改めさせ、よきことを行うための基礎は、3つの神学的徳である信仰、希望、愛である。これらなしには、いかなる者も、繁栄に至る道を探し当てることはできない。

<sup>109</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 204. 信仰に関して、過信とあるが、それは羊飼いなら誰しも自分自身に信仰があり、それが過信なのである。

<sup>110</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 204. これは愛にかかわるが、神の愛における燃える愛全てのことをさす。

y verdura<sup>111</sup> todo el año<sup>112</sup>,  
no podrías haber daño  
en el ganado ni en mieses.

緑のものは一年中食べつくされる  
君に害はありえないだろう  
家畜にも畑にも

### Copla XX<sup>113</sup>

Mas no eres envisado  
en hacer de tus provechos<sup>114</sup>:  
echaste a dormir de pechos  
siete horas amortiguado<sup>115</sup>

君は確認されていない  
君の精神的な進歩がなされているか  
君は足を投げ出して眠る  
七つの大罪にまどろみながら

<sup>111</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 204. 希望のことをいい、緑のものを意味する。我々はこれらの美德に多くを負っており、生涯にわたって、これら全ての一つも欠かすことはできない。

<sup>112</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 204. 全人生の意。第一の神学的徳である信仰については、聖パウロは信仰は精神の輝きであるとし、聖グレゴリウスは人間の理性を試されるのに賞はないと述べている。聖パウロはヘブライ人に神を喜ばせる信仰のない人間など不可能であるといっている。これと同様に聖トマスは、『神学大全』(Thomas Aquinas (稲垣良典訳)『神学大全: *Secunda Secundae* QQ. 17-33.』創文社、1987年)の中で、人の完徳は、先天的なものに基づくものではなく、神の善意からの超自然的な完徳が与えられることによるものでもなおさらない。信仰を信じるために適当であるが、信仰を堅く信じられ、後に神を和らげる。神に対して穏やかであるなら、後に真の幸せを享受することとなるだろう。証明された箇所のごとく、善の基礎というのは、信仰を欲することである。希望は、賞賛に値することを望む魂に思想を到達させる徳である。これが真の希望である。真実は信仰と混ざることなしに存在しえない。しかし、信仰は過去のことであり、まだ起こっていないことである。希望は将来についてのみのことである。これ以上この徳について話を長引かせないが、聖アウグスティヌスは『手引き *Enchiridion*』において、希望は神に帰属するものであり、神に望むことへ注意を払うことを示すことであるとしている。詩篇 26 で、先唱者が調和することについての箇所、神は神に希望を持つものを救うと述べている。愛は、もう一つの神学的徳で、清い心と、純潔の意識に与えられるものである。その徳でもって人は神を満足させ、これなしには不満にさせるのである。愛を通して喜ばせ、満足させるまでそこでもあそこでも誰もよいことをするとは考えないように、全てを閉じなさい。この美德については、すでに多くの著述があるので、聖パウロの、徳の大部分は愛であるという言葉で締めくくことにする。もし成すときに愛が介入していないなら、他の全ての成した財は何の価値もない。この徳が欠けていながら、今生に栄光はなく、来世でも栄光あることを期待できない。

<sup>113</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 206. 全ての裏切り、全ての罪、全ての悪は、愚かさから生じる。ある人が機知ある誤りに見えるが、それは機敏さではなく、愚かだったのであり、少なくともその意味で誤りを犯している。愚かに見えるとわかるなら、了解することにおいて慎重であると考えなさい。このように愚かであるほど、なにも成さない。Pulgar, *op. cit.*, p. 208. このコプラでは、民衆が眠っており、七つの大罪全てに覆われ、世俗のことしかみていないため、なにをなすべきかわかっていないとしている。そして良き道に戻るように説諭している。もしそれをしないなら、永劫の死を招き、それが最悪の事態であるとしている。

<sup>114</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 206. 真の幸せに至るためのよき生活へと修正する徳において理解できる。なぜなら、これらの世俗的な混乱の中で機知が用いられたように見えることは、偶然によって起きており、神の摂理の僕が他の目的へと修正され、その宣告は現在のことにはされない。

<sup>115</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 207. 七つの大罪全てに覆われていると理解する。胸から、というのは、地とそこでの空虚で移ろいやすい事柄を見ながら口が下を向いていることである。そして天や聖な

Torna, tórnate a buen hanzo<sup>116</sup>,  
Enhiéstate ese corpanzo<sup>117</sup>  
porque puedas reviver<sup>118</sup>;  
si no, teme que el morir<sup>119</sup>  
te verná de mal relanzo<sup>120</sup>.

戻れ、戻れ、よき喜びに、  
奪われた鳥の体を起こしなさい  
再びよみがえることができるのだから；  
もし、死を恐れるなら  
ふいに君に訪れるだろう。

Copla XXI<sup>121</sup>

Si tu fueses sabidor  
y entendieses la verdad  
verías que por tu ruindad  
has avido mal pastor.  
Saca, saca de tu seno<sup>122</sup>  
la ruindad<sup>123</sup> de que estás lleno

君が知恵者であるなら  
真実を理解するだろう  
君のさもしさがわかるだろう  
君は悪しき羊飼いを持った  
君の胸から取り出してしまえ  
君の中で一杯になっているさもしさを

るそして永劫的な天のことを口を上にしてみていないということである。「安らぎながら」は、死罪で誰かを捕まえたら、死罪になる間、安んじていたことによると語ることだろう。七つの大罪すべてによって治められているほど、預言者がいうには民衆においても治められていたのである。

<sup>116</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 207. 農民たちは、その快樂にあり、悦びの中にある、と述べている。苦悩にないものは誰も死罪にあらず。ここでの悦びに戻れというのは、悲しみをもたらす悪を引っ込め、善に転向することは、悦びをもたらすことだと説諭している。

<sup>117</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 207. やらなければならぬように、そして曲がることなく、やっているように、右を歩みなさい、と述べている。

<sup>118</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 207. 死罪からの者でも再び生き、再び生まれ、許されている状態に戻る。

<sup>119</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 207. ここでは、永劫の死でもって警告している。

<sup>120</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 207. 考えなければ、注 112 を引き起こす。

<sup>121</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 209. コブラ 19 では、神は民衆の原罪によって、欠陥のある偽善的な主君を遣わすと言明された。このコブラでは、この言明が必要以上に明白であると述べつつ、再度言及している。もし民衆がみななければならない理を見れば、自らの責により悪しき羊飼いがあったことを知るだろう。そして、常としている考えを取り去れば、どのように、かの王が強要する悪行によって罰せられ、神が別の善き羊飼いを与えるのかを見ることとなるだろう、と説諭している。

<sup>122</sup> Pulgar, *op. cit.*, pp. 209, 211. 胸中には、悪と我々が犯す罪が抱かれている。そのため、なんらかの我々が犯す罪が我々を刺す時、当然のことながら、罪を犯した者を罰するように、我々は胸を刺すだろう。セネカの『悲劇』第一巻を読むと（『セネカ悲劇集』1・2巻、京都大学学術出版会〈西洋古典叢書〉、1997年）、テセウス王がヘラクレスになぜ妻と子供たちを殺したのかを述べている。胸をよく痛めなさい、なぜなら胸はかくも多くの悪を抱えているのだから、小さい打撃では痛むはずがないのだからと。

<sup>123</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 209. 抱えた罪を、贖罪しながら肅清せよ。このことは、民衆が罰せられたのをみながら、ああいう支配者が罰せられることを保証するものである。さもなければ、神が他のよい支配者を与えてくれる。王国の分裂によって、地上は盗みや詐欺に苦しみ、かくも甚大で一般的であるので、暴力と罪に事欠かない場所はない。このように悪がかくも根深く、それらからの救済に人知が及ばないなら、我々のおかれていた不運の救済者である神は、民衆の改心によ

y verás como sera  
que éste se castigará  
o dará Dios otro bueno<sup>124</sup>.

そしてどうなるかがわかるだろう  
この羊飼いは罰せられるか  
神が他のよき羊飼いを与えてくれる

### Copla XXII<sup>125</sup>

Los tus hatos a una mano  
son de mucho mal chotuno<sup>126</sup>,  
lo merino<sup>127</sup> y lo cabruno<sup>128</sup>  
y peor lo castellano<sup>129</sup>. カスティーリヤの羊にとってよくないことである。  
Muévase muy de ligero<sup>130</sup>,  
no guarda tino certero<sup>131</sup>  
do se suele apacentar;

君の家畜の群れは皆一緒に  
とても重い病気にかかり、  
メリーノ種の羊と山羊たち  
軽々と移動し、  
目的を持たずに  
日々放牧するところ；

る慈悲により動かされ、民衆に、ファン二世の娘であり、アラゴン王フェルナンドと結婚したイサベルを代わりに女王として羊飼いとて与えた。ほどなく、彼女の処置により、全ての不正は正義に、傲慢は忍耐に、数多のそして大きな戦争と対立は平和と平穩へと転換した。このように王国は安寧を享受した。そして正義は力を回復し、傲慢に振舞い、罪を犯すことを常としていたものは身を縮め、不名誉なことを思い切って言うことなどなおのことない。物事は、思い出せないほど前からなかったほど素晴らしく、それはたった一人の女性の短期間の尽力と統治によるものである。このように我々はこの預言者羊飼いが大分前に述べた、神が別の良き羊飼いを遣わすという御業をみたのである。

<sup>124</sup> この王（エンリケ4世）が行いを改めるか、もしくは神が他のよき王をお与えになるだろう。この『ミンゴ・レブルゴの詩』が1465年に作成された少し後で、エンリケ4世の弟アルフォンソ王子が即位した。

<sup>125</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 211. このコプラの中で預言者は、スペインの全ての者、特にカスティーリヤ人を叱責している。メリーノ種とヤギとカスティーリヤの羊毛があることを知ってのことである。良きことに一致してあたらず、悪しきことに従順であることを叱責している。

<sup>126</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 211. ヤギをやつれさせ、衰弱させる病気のこと。ここでは、「手元の全ての家畜」すなわち全てのスペインの王国が、「とても重い病気に罹っている」と述べている。悪い病気というのは、弱っていて、整っていない羊たちによる羊飼いのことである。なぜなら当時、カスティーリヤ、アラゴン、ナバーラそしてグラナダでさえも分裂していた。ここでは全ての家畜の群れというのは、スペインの諸王国のことで、それらは状態が悪く、「カスティーリヤ人がその中でより悪い状況にある」と述べている。

<sup>127</sup> アンダルシアとエストレマドゥーラで特別に飼育されているメリーノ種の羊。

<sup>128</sup> 山羊のことで、ラ・モンターニャやビスカヤなどのより鄙びた地域のことを示している。

<sup>129</sup> カスティーリヤの羊、すなわちカスティーリヤを指す。注釈の一つによれば、祈る者、戦う者、働く者の三身分のアレゴリーとして扱われている。

<sup>130</sup> Pulgar, *op. cit.*, pp. 211-213. ここではカスティーリヤが他のところよりも悪い4つの理由を挙げています。カスティーリヤ人が可動的であることについて叱責している。

<sup>131</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 213. 第二に、なぜ育成され、保持する自ら生まれた土地に持つべき愛や中世を持たないのかと述べている。

rebellado al apriscar<sup>132</sup>,  
manso al tresquiladero<sup>133</sup>.

家畜の囲い場に入れられる際に抵抗し  
毛を刈られる時はおとなしくしている。

### Copla XXIII<sup>134</sup>

De un collado aquileño<sup>135</sup>  
viene mal zarzaganillo<sup>136</sup>  
muerto, flaco, amarillo,  
pára todo lo estremeño<sup>137</sup>.  
Mira agora qué fortuna<sup>138</sup>  
que ondea la laguna<sup>139</sup>

北の鞍部から  
悪しき北からの風が吹いてきた  
死者、痩せこけた者、血の気のない者  
全てエストウレマドゥーラの方へ。  
見てみよ、今なんという嵐が  
涙を波立たせているのか

<sup>132</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 213. 第三に、羊飼いたちが家畜を囲いや網の中に入れることを、囲い場に入れる (aprisar) と呼ぶが、ここでは組合の規則を守らず、地に平和を与えるべく一致しなければならぬように、一致していないことを知らなければならぬとする。

<sup>133</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 213. 第四には、墮落といかなる力にも活力がないことを批判している。

<sup>134</sup> Pulgar, *op. cit.*, pp. 214, 217. 預言者たちが記したように、民衆をその悪徳と罪から叱責しながら、最終的に、民衆にもし行いを修正し、神の下に戻らなければ災厄がやってくるだろうと告知している。この預言者は、ここまで民衆の罪について叱責してきた。このコブラと次のコブラでは、大いなる悪と災厄がやってくると知らせている。なぜなら神が預言者エレミヤに、北風の一部により、地の住民たちの上に大いなる災厄がもたらされるといったからである。このコブラでは、北風の神ボレアス (北風、むさぼり尽くす者) の一部から全てのものに災厄が訪れ、そして特に持つものところにやってくると述べている。この全体的な災厄は船乗りたちにとっての大風の兆候である、海に風のない波があるのを見ることで、確かなものとなるのである、と述べている。

<sup>135</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV, op. cit.*, p. 229. エレミヤ書、1.14「北風から全ての悪がもたらされる」。

<sup>136</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV, op. cit.*, p. 229. 悪しき風のごとで、山からの悪しき風が、死者、弱った者、最上の家畜全てに吹きつけるの意味。Pulgar, *op. cit.*, p. 214-215. 悪の痛苦から腐敗は引き起こされるのである。ガジャルド注釈版 (*El Cancionero de Callardo* (ed. Azáqueta, J.M., Madrid, 1962) には、以下のコブラが続く：Otra cosa más dañosa / 別のより大きな損害は / Veo yo que no has mirado: きみが見ていないことを私はみている / Nuestro carnero, en Bezado, / 我々の雄羊は、いつものように、 / Va a dar en la reboltosa. / 混乱に与えられる / Y aun hay otra más negrilla, / さらにより黒きことがある / Quel de falsa rabadilla / 偽の肉が / Muy ligero corredor / 軽々しくすばやく走り / Se metió en el sembrador: 種まきにつっこみ / A la he haze royn orilla. / さもしい丘にしてしまう。

<sup>137</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 215. 北風と合わせて、大いなる災厄のごとである。先端を通る家畜は最も太っていて元気がよい。なぜなら一般的な悪しきものは、もっとも持っている土地を常に痛めつけるからである。最も持っているところに、損害を与えうる富があるからである。

<sup>138</sup> borrasca, tempestad と同意で、暴風雨や嵐を意味する。

<sup>139</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 215. もう一つの来るべき災厄の兆候を示している。船乗りたちが、海が暴風なしに波立つのを見ると、海から嵐がもたらされると信じる。上からの風を感じないときは、海面下に嵐を内在し、危険であると考え。セネカはテュエステスとアトレウスの悲劇において以下のように述べている (『セネカ悲劇集 2』(岩崎務他訳、京都大学学術出版会、1997年)。猛

sin que corran ventisqueros;  
rebosa por los oteros,  
no va de buena chotuna.

吹雪くことなしに；  
丘であふれ、  
病気のヤギとなることはない。

Copla XXIV<sup>140</sup>

Yo soñé esta trasnochada  
de que estoy estremuloso,  
que ni roso ni vellos<sup>141</sup>  
quedará de esta vegada.  
Echa, echate a dormir<sup>142</sup>,  
que en lo que puedo sentir  
según andan estas cosas,  
asmo que las tres rabiosas<sup>143</sup>  
lobas habrán de venir<sup>144</sup>.

私は夜更けに夢を見た  
それにより私は打ち震える  
大なるものも小さきものも  
この光景のために。  
眠れ、とにかく眠れ、  
私は感じる  
これらのことがあることによって  
推測するに、三匹の行かれる雌狼が  
やってくるに違いない。

り狂う嵐は、海に風がなく増水している時、船乗りに襲い掛かる。ここで預言者は、涙は風なく波立つ海であると理解し、嵐と悪が来るに違いないと述べている。この意味するところは、王国内に、内含するに最悪なうねりや騒擾があるということである。そのため王国内に大きな嵐が到来すると知らせ、確かにそのようになった。というのも、このコプラが作成された後別の年に、王国に大なる損害と悪をもたらした内戦があったからである。

<sup>140</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 217. 全ての預言者が同じ予言をするわけではない。一つの方法だけによるものでもなければ、好きなきに預言するものでもない。聖書の中で預言者エゼキエルは、エルサレム王に、かの王と他の二人の王が開戦する戦争の結末を預言するよう求められ、その際その場にはいない預言の精霊を起こす弾き手を要求した。他の預言者たちは善き天使の知らせによって、将来のことを知っていたのである。他の者が預言したのは、預言の精霊が直感に働きかけ、来るべきことを語ったからである。ほかのものには夢の中や、聖書に出てくるような他の多くの方法で未来のことが明らかとなったのである。預言者たちは、他の時代では予見者 (videntes) と呼ばれ、予見しただけではなく、見たものをより理解していた。このことは、起きるべき事を見たが、理解していなかったものたちがいたことをいっている。ファラオが見た穂と牛のように、そして、バルタサルの壁に手で書いた光景のように。しかしそれぞれなにを見たのかは理解しなかった。このように真の預言者は、見るだけでなく、見るものを理解するべきなのである。預言者は、来るべきものを述べつつ、隠れた物事を明らかにするのである。この預言者は、ここで夢を明らかにしたことを作り上げているのである。

<sup>141</sup> Morel-Fatio, A.P., *Bulletin Hispanique*, IV, 1902, p. 257-258. 例外なく全ての意。プルガールにとっては、rosoは毛をそられた、もしくはまだ毛が生えていないを意味する。子供も、大物にも災厄は降りかかり、全ての者に次から次に用意されているのである。

<sup>142</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 218. ここでは脅しながら眠ること以外のことはするなどいっている。

<sup>143</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV*, *op. cit.*, p. 230. 飢餓と戦争とペストのこと。

<sup>144</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 218. 前後三つのコプラに続いているように、空腹、戦争、疫病がやってくるお知らせしている。

## Copla XXV

Tu conoces la amarilla<sup>145</sup>  
que siempre anda garleando,  
muerta, flaca, sospirando,  
que a todos pone mancilla.  
Aunque traga no se harta,  
ni el pensamiento se aparta  
de morder y mordiscar,  
no puede mucho tardar  
que el ganado no desparta<sup>146</sup>.

君は飢餓を知っている  
いつも空腹であくびをしながら歩いている  
死を衰弱を嘆息しつつ  
全ての者に汚点をつける。  
がつつ食べても満腹せず、  
牙で噛み付き放さない  
齧ることや噛むところをみると、  
そんなに時間はかかれない  
家畜から離れるのに

## Copla XXVI

La otra mala traidora<sup>147</sup>,  
cruel y muy enemiga,  
de todos males amiga<sup>148</sup>,  
de sí mesma robadora<sup>149</sup>,

いま一人の悪しき反逆者  
残酷で、大変な敵であり  
全ての悪の友で  
彼女自身盗人で

<sup>145</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV*, op.cit., p. 230. 飢餓のことである。

<sup>146</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 219. 最初に、今この預言者は再び地に共通する空腹について述べ、理由を黄色 (amarilla) と呼ぶ。なぜなら空腹のものは黄色く、よりやつれているからである。パンと生活必需品が減少している時期においては、たとえ我々が満腹していても、パンが無くなってしまふことを疑い、常に飢えているということになると述べている。その上、空腹の時代というのはかくも残酷で、他の者に持たせないようにもする。各々自分のことのみを考え、多くの場合人々は生活必需を満足させるための豊かさがある場所へと、散り散りとなる。

<sup>147</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 220. ここでは再びすぐに戦争が起こるとし、特に王国の中にある反逆者が理由であるとしている。戦争には欠けるべきなんらかの汚点はなく、また多くの欺瞞もあるからである。それは裏切りにも至る。

<sup>148</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 220. *Bellum Catilinae*のサルルスティウスが最後、特に最後の一説に載せている逸話について言及している (ガイウス・サルルスティウス・クリスプス (合阪學, 鷲田睦朗訳) 『カティリーナの陰謀』大阪大学出版会、2008年参照)。これは疑いもなく真実である。なぜなら戦争というのは、陰謀や内外からの悪で充滿しており、持ち続けられているべき友情が守られていないからである。ローマ人の不和において、他のローマ人との戦場において大いなるすすり泣きをしたことについて読みなさい。なぜならローマ人たちが略奪に行った際、そこである者は兄弟を、他の者は従兄弟を、別の者は息子を見つけたからである。このように勝利が与えた喜びは、自らの血の殺人を見ながら、嗚咽と哀しみに変わったのである。ここで兵士が貪欲からの不和によって到達するものよりも、慈悲からの和合による慈悲深さの方がより多くを得るのだと考えることができる。

<sup>149</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV*, op.cit., p. 230. 戦争というのは内戦のことで、盗人自身によりカスティージャにおいて1465年に『ミンゴ・レブルゴの詩』が作成された翌年に勃発した。

que sabe ya los cortijos<sup>150</sup>,  
no dexa madres ni hijos  
yacer en sus albergadas,  
en los valles ni majadas  
sabe los escondredijos.

### Copla XXVII

Y también la tredentuda<sup>151</sup>,  
que como los recentales<sup>152</sup>,  
y no dexa los años  
cuando un poco está sañuda<sup>153</sup>,  
cuido que no tardará  
de venir y aun tragará  
también la su partecilla.  
Dime, aquesta tal cuadrilla,  
?a quien no despantará?

### Copla XXVIII<sup>154</sup>

Cata que se rompe el cielo<sup>155</sup>,  
decerrúnase la tierra<sup>156</sup>,

既に農場を知っていて  
母も子どもも見逃さない  
そこにいる者の中に生まれるようと  
谷で生まれようと牧舎であろうと  
子を隠す者たちを知っている

そして獣もまた  
乳離れしていない子羊たちのように、  
幼いやぎを放っておかない  
疫病にやや冒された時  
遅くならないように注意する  
来ることをそして感受さえするだろう  
その小さな部分をも。  
私にいいなさい、このような厩が  
誰を怖がらせないというのか？

天が崩壊するのを初めて見る  
地が割れるのを、

<sup>150</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.221. 内戦が野原、都市、家々、全てに広がっており、内戦期においては、人々は構想を自らの内にさらに持っているのだと述べている。それは、民衆の中に共通して様々な性質で治めている罪によって、神が地にこの状況を許容しているのである。聖アウグスティヌスは *De Civitate Dei* (『アウグスティヌス 神の国』(服部英次郎、藤本雄三訳注) 岩波文庫全5巻、1982年) の中で、腐敗した習慣を改めないため、神は王国に戦争を容認するのだと述べている。

<sup>151</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.222. 『ダニエル書』7章5節に出てくる獣のこと。ここでは獣と呼ばれる疫病についてさらに立ち戻っている。三本の歯で噛み付くということから、三つのやり方で、もしくはペストと、汚染された空気、水、地によってやってくるからである。

<sup>152</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.222. 疫病は青年におけるものという印象がある。ここで乳のみ期の子羊によるもの、すなわち老人におけるものというよりも、若者におけるものと述べている。なぜなら若者はより血が興奮しているからである。

<sup>153</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.222. 老いも若きも見逃さず、全てを持っていってしまう。

<sup>154</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.223. 預言者は、もし改悛しないなら特に民衆に災禍が訪れると述べた後で、このコブラで、民衆に痛悔を促している。

<sup>155</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.223. 父として息子の更生の意向のため、民衆を脅している。天が君に対して怒っているのを初めて見る、と述べている。

<sup>156</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.223. イザヤがいうように、貪欲と傲慢が支配的な土地において、土地の住民自らが腐敗と破滅をもたらすのだ。

el nublo todo se cierra,  
rebellado, ¿no has recelo?<sup>157</sup>  
Cata que vendrá el pedrisco<sup>158</sup>,  
que lleva todo a barrisco  
cuanto mires de los ojos;  
hinca, hinca los hinojos<sup>159</sup>.

雲が全てを閉ざすのを、  
抵抗されても、疑いがないのか？  
大粒の雹がやって来るのを初めて見る  
全てをさらいながら  
目でどんなに見ても  
突き刺せ、突き刺せ、膝をついて

<sup>157</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 223. ここでは、執拗な反乱について、君は痛悔なき謀反に恐怖を抱かないのか？と非難している。

<sup>158</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 223. 誰かがいっているように、あらゆる地点からすべてを攫い、破壊するような嵐が来るのを見張りなさい。

<sup>159</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 223-226. 良き神学博士と助言者のように、祈りなさいといっている。そして、続く三つのコプラにおいて、告解に行き、痛悔を持ち、償いをせよと説論している。罪を治せばそこにある悪が明らかとなり、来るものを回避するからである。これら教会の秘蹟により我々のカトリック信仰の教義をよく見る者は、天国の浄福者になるためにそれらを通じて我々に示されている。もちろん汚点なき法もみるだろう。我々の降伏者キリストが福音によって命じるように、魂を改めよと述べている。もし法という名前が既にありえたとして、シナイ山においてモーゼが神に与えられた法は、その石版は、雷鳴、稲妻、煙、その他の大音響を伴い、与えられたのだ。我々が読むところによれば、武力によって広められ、かの地の指導者であるモーゼとヨシュアが、カナンの王国を打ち負かし、椅子や家から力づくであれらの人々を追い出したのである。ムハンマドも同様に多くの戦いに打ち勝ち、多くの人々を支配し、兵力によって法を敷き、それを守るよう命令した。しかし我々の降伏者キリストの法は、雷鳴によって与えられたわけでも、兵力によって広められたわけでもない。むしろ恩寵からの法として、キリストは無限の恩寵により、おだやかに我々に法による謙虚さ、従順、慈悲、忍耐、平穩、我慢強さ、平等、奉仕そして悔悛を与えた。騎士は馬上にあって騎士なのではなく、ロバにあってこそなのである。我々が述べたこれらの武器によって、法はこのような一般民衆に広まった。このことは、誰が魂を改心させる汚点なき真の法をしらないほど無知であるのか？ということを考えさせる。謙虚を説教し、侮辱からの忍耐を支持しながら、多くの人々の中に増大するのである。『聖書』を読むと、預言者エレミヤは、山の中で、神を前にして、山を引つ掻き回し、石を割るようなすごい風が吹いたが、神はそこにはいなかったと述べている。その後、全てをごちゃごちゃにするような大地震が来たと述べているが、そこにも神はいなかったといっている。それが過ぎて、突然大火事が起きたが、そこにも神はいなかったといっている。大火事が過ぎ、耳を細かく優しいそよ風がふいたが、その穏やかさの中に神はいたといっている。このあり方は大いに考えられることである。我々の降伏者イエス・キリストはこれまで示してきたように、驚かせるような雷鳴や流れる煙とともにではなく、心をやわらげる謙虚さと救済する慈悲とともに聖なる法を与えにやって来たのである。このように、暴風雨と大嵐の後に、神は穏やかで危険のない気候を与えた。このように、信者はシナイ山でモーゼが十戒を受けたときにあったあれらの雷鳴や稲妻が、我々の降伏者キリストが魂を悔悛させる、汚点なき聖なる法を我々に与えた忍耐と安全を意味するメッセンジャーを意味したことを理解しなければならぬ。そしてあの法が真の救済者によって懐胎され、聖母マリアの処女なる腹から生まれたときに、生み出されたのである。預言者は、内面の謙虚さでもって、まやかしくなく、真摯に祈らなければならぬに都市、そうでなければ、膝をついて突き刺す価値は何もないとしている。セデキアス王は、バビロニアで捕らえられた時の祈りの中で、膝をつかず、さらに突き刺したので、私の心の膝はあなたの前に刺すと神は彼にいった。これらのことは、祈りにおいて神の前に体を傾けなければならないことを、神にしなければならず、また神が欲していることである。

cuanto yo todo me cisco.

私を恐怖にとり乱させる。

Copla XXIX<sup>160</sup>

Si no tomas mi consejo,  
Mingo, de aquesta vegada  
habrás tal pestorejada  
que te escueza el pestorejo.  
Vete si quieres, hermano,  
al pastor del cerro fano<sup>161</sup>,  
dile toda tu conseja,  
espulgarte ha la pelleja<sup>162</sup>,  
podrá ser que vuelvas sano<sup>163</sup>.

もし私の助言を受け入れないなら、  
ミンゴよ、順番に身をかがめ  
首筋への殴打を受けるだろう  
後頭部に痛みを感じる  
もし望むなら、去れ兄弟よ、  
険しい寺院の羊飼いへと、  
君の助言全てをいえ、  
罪を清め、  
また健康を取り戻すことができるだろう

Copla XXX<sup>164</sup>

Mas, Revulgo, pára mientes  
que no vayas por atajos:  
farás una salsa de ajos<sup>165</sup>  
por miedo de las serpientes<sup>166</sup>.

さらに、レブルゴよ、注意しなさい  
近道からいくような嘘のないように  
にんにくソースを作りなさい  
蛇の恐怖によって。

<sup>160</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.227. ここでは民衆に告解をするように説諭している。そして、もし助言を取り入れないなら災厄を持つことになるだろうと述べている。

<sup>161</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.227. 神殿の聖職者に、どのような意図で罪を犯したのか、罪を犯す全ての状況と共に、全ての罪を懺悔するようについている。聖トマスは、告解は、場所、どのくらいの期間罪を続けたのか、何回犯したのかを明らかにしながら、穢れなく、真実のそして完璧に行わなければならないとしている。

<sup>162</sup> Pulgar, *op. cit.*, pp.227-228. 罪人が懺悔を果たした後に、聖職者が質問しながら行わなければならないことを述べている。聴罪師が、偉大な審問官であらねばならないのは疑いが無い。告解者が恥ずかしさから、忘却からもしくは無知からなんらかの汚点を言わないなら、聴罪師は質問によって、「羊皮のシラミをとる」ことをしなければならず、これにより全てが暴かれるだろう。

<sup>163</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.228. 懺悔だけでは健全にはならず、なれるようにしかならないと述べている。もし我々が言ってきたように、告解が真の懺悔の介入なしにされたなら、救済されないと理解できる。

<sup>164</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.229. 預言者は告解においてすべき懺悔の仕方を示している。先のコブラで述べたように、穢れなく真実の告解をするべきで近道を行ってはならないと述べている。

<sup>165</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.229. なぜなら告解で最も主要なことは懺悔だからである。Agiósはギリシア語で聖なるもしくは神のことを意味する。そのためソースを作るように助言している。心からの懺悔は、夜に道を行く人とロバで行く人が食べる、にんにくソースと比較される。なぜなら野原で眠りながらも、小さな蛇やしつこいほかの蛇が来ず、蛇は大森から逃げてしまうからである。

<sup>166</sup> Pulgar, *op. cit.*, p.229. 我々の母イブを誘惑した蛇への誘惑への恐怖から、を意味する。

Sea morterada cruda<sup>167</sup>  
bien machada y bien aguda<sup>168</sup>  
que te faga estortijar<sup>169</sup>,  
que no puede peligrar  
quien con esta salsa suda<sup>170</sup>.

白でひかれた生の  
大槌でよく突かれて、とても鋭く  
君を吐かせるだろう  
君から罪を追い出すだろう  
このソースで汗かく者は

Copla XXXI<sup>171</sup>

En lugar de Pascual  
harás tu apacentadero<sup>172</sup>  
porque en el sesteadero  
pueden bien lamer la sal<sup>173</sup>.  
Con la cual, si no han rendido  
la grama y lo mal pascido<sup>174</sup>,

宗教における救済の場に  
避難しなさい  
なぜなら休息の場において  
塩をよく舐めることができるからである。  
そのためもし屈服してしまわないなら  
悪しき芝を食べてしまうことに

<sup>167</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 229. 痛悔は侵害であるからである。

<sup>168</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 230. このような方法でよく突かれたら、罪の厳しさが弱められる。

<sup>169</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 230. 告解において持つべき悔悟の大いなる痛み。

<sup>170</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 230. ここでは健全な魂のための果たされる救済手段が与えられている。もしこのソースで汗をかき、痛悔と犯した罪の痛みで涙すれば、痛悔は完全となり、告解をしながらかわれるのである。

<sup>171</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 231. 預言者が民衆に先の三つのコブラにおいて、祈り、懺悔し、悔俊することを助言した後で、このコブラでは、著者の意図に対して、詩篇の以下のように始まる、最初の言葉に則った反応をするように述べている。 *Dominus regit me el nihil mihi deerit* 「神が私を導いたことでいかなることも失敗しない」と。

<sup>172</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 231-232. この詩句では *in loco Pascuae ibi me collocavit* 「この牧用地で私は休息される」が引かれ、このコブラの冒頭に置かれて述べている。パピアスによると、ラテン語で Pascual の語は、魂のそして永遠の食事であるとしている。なぜならこのような食事は、悪しき家畜を返しながらか、到達させ、ここでいう復活の場というのは、かの魂の食事が、放牧させるのだと知っておくとよい。そこでえきを与えろと述べている。そこで飼育された全てのことは信じてことができ、いかなることも失敗することはない。悪しき家畜を戻すことは、悔俊の徴である。もし徴があるなら、神とよい関係にある。もし神と良好な状態にあるなら、確実に以下のことがいえる。神は私を導き、私は如何なることにも、たとえ全ての悪しき家畜が戻ってきても、失敗する恐れを抱くことはない。

<sup>173</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 232. 休息は日中であり、塩は知であると理解できる。この作品を作成した意図は、日中、すなわち人生半ばにいる人間がこの休息、もしくは昼寝をすることである。塩をなめなければならない理由は、主としてその魂が成すところを知るために全幅の判断をすることをしなくてはならず、どれほどの損害が関わりのない降伏をもたらすのかを知らないことは知ることができないのである。なぜならもし戻らないなら、真の知識の塩をなめることはないからである。

<sup>174</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 232. 真の知を持つということが何なのかを明らかにしている。ギョウギシバは甘く、家畜に害のある草で、それを沢山食べると太って、死んでしまう。ここでは、しかるべき手段で獲得した富と比べてみるとよい。一見このようなやり方で人は豊かになったように見え

luego lo querrán gormar<sup>175</sup>  
y podrán bien sosegar  
del rebello que han tenido<sup>176</sup>.

後にそれを吐きたがるだろうことに  
そしてよく休息をとることができるだろう  
君が争った反乱からの。

Copla XXXII<sup>177</sup>

Cuido que es menos dañoso  
pacentar por lo costero<sup>178</sup>,  
que lo alto y hondonero<sup>179</sup>  
juro a mi que es peligroso.  
Pero cata que te cale  
poner firme, no resbale  
la pata<sup>180</sup> donde pisares  
pues ha tantos de pesares  
in hac lachrymarum valle<sup>181</sup>.

より少ない損害を気にかけて  
海岸あたりを羊が草を食む  
高く、窪んでおり  
危険であると断言する。  
しかし君を暖めることを初めて経験する  
確固とし、過ちを犯さず  
踏み込む足は  
かくも重く押し掛かる  
この涙の谷間で。

るが、しかし他の人生の苦悩を見捨てながらであり、この中で、飼い主に、悪しきやり方からの大きな争いの損害を与えることを我々は頻繁に見る。

<sup>175</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 233. もし真の知識を有しているのが確かなら、後に復活し、後にその相続者たちに委託するための復活はさせないだろう。なぜならその人生を復活させない男性の強欲は、それ自体はその相続人たちが、それを行わないために所有し、またしなければならぬほど完全にはなさないのを我々は見てきた。復活を成したというのは、しなければならぬことをした魂のストライキである。

<sup>176</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 233. 反乱と厳しさは、他のことを持つことに固執することにおいて持たれた。

<sup>177</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 234. これまでの31のコブラによって述べられた方法における話が終わり、この終末において人生の半ばを賞賛する。双方とも再び勢いづきうる危険から非常に高くもとても低い中にもそれほど低くならないようにしなければならぬと述べている。ソロモンは『箴言』の第30章で神にこう述べている。神よ、私に貧しさも多くの富も与えないで下さい。なぜなら富は傲慢さを促さず、貧しさは、私に浅ましく醜いことをさせることを強いることはありません。主よ、私に必要な生活の糧をお与え下さい。このことに一致して、ここでは預言者に述べている。

<sup>178</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 234. 地位と中庸で生活する方法を持つことは、害がより少ないように考える。

<sup>179</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 234-235. 理由はソロモンが述べたものである。中庸がよいとは入っておらず、より損害が少ないと言っているに留まっている点が顕著である。この世ではどんな状況にあっても苦しいものであると注記している箇所であり、そして次の説論の箇所でも明らかにしている。

<sup>180</sup> Pulgar, *op. cit.*, p. 235. 悪賢さなく、生の悪しき業なく、右の道を歩くことを成し遂げよと述べている。つまり、この涙の谷に生きる悪しき業とともに歩み他のもののように、この世においても陥るような過ちを犯さず、曲がらずにいるようにと。恩寵と栄光によって生活するように、神に服することである。アーメン。

<sup>181</sup> *Poesía crítica y satírica del siglo XV*, *op. cit.*, p. 232. 中世の「幸いなるかな女王」を通して広まったラテン語の語句。 *La Celestina* (Fernando de Rojas (杉浦 勉訳)『ラ・セレスティーナ』国書刊行会、1996年、354頁) も同様に締めくくられている。